

富山県上市町

中世城館調査報告書

1994年3月

上市町教育委員会

富山県上市町

中世城館調査報告書

1994年3月

上市町教育委員会

序

上市町教育委員会では昭和63年から平成4年にかけて町内全域にわたる遺跡詳細分布調査を実施してまいりましたが、その事業の完結として町内の中世城館の調査を実施致しました。調査は以前から町内の城跡調査を行っておられた高岡徹氏にお願いし、現地での測量、地域と城跡との関わり、文献史料の調査も含め多岐にわたる分析をお願いし原稿をいただきました。ここにその成果を報告書として刊行するにあたり深く感謝申し上げます。今後この史料をもとに史跡の保護活用にいっそうの努力を傾注するとともに本書が上市町の歴史ひいては富山県の歴史を物語るよすがとなれば幸です。

平成6年3月

上市町教育委員会

例　　言

- 1 本書は富山県中新川郡上市町に所在する中世城館跡の調査報告書である。ただし、城館の性格上、隣接する滑川市・立山町の城館についても一部とりあげた。
- 2 本調査は、上市町教育委員会が平成5年度に城郭研究者の高岡徹氏に委託し、実施したものである。
- 3 本書の執筆・各図の作成は高岡徹氏が担当し、編集は上市町教育委員会と高岡氏が協力して行った。
- 4 調査にあたっては地元をはじめ町内外の多数の方々から御協力をいただいた。深く感謝する次第である。

目　　次

序

例　　言

はじめに	1	参考	
1 謾摩堂城	3	9 小森館（滑川市）	35
2 郷柿沢館	6	10 日中砦（立山町）	37
3 稲村城	10	11 高原城（　　）	41
4 千石山城	13	上市町の城館について	42
5 弓庄城	17	おわりに	47
6 郷田砦	24		
7 柿沢城	28		
8 茄荷谷山城	31		

はじめに

上市町は富山县の旧新川郡西部にあって、主に西の白岩川から東の早月川にかけての内陸部に町域を占める。平野部の開発は古く、中世には町域の北部に堀江庄、南部に井見庄などの庄園が形成された。こうした庄園に地頭代や代官として土着したのが、相模出身の土肥氏である。土肥氏は鎌倉期に越中へ入国し、堀江庄を本拠地として在地領主化をとげ、戦国期には井見庄にも進出し、越中東部の有力国侍として成長するに至った。その支配領域は、最盛期において現在の上市町から滑川市・立山町・富山市の一帯に及ぶ広大なものであった。室町・戦国期、新川郡は魚津・松倉城を拠点とする守護代椎名氏の統治下にあったが、土肥氏は、守護畠山氏の雑掌の立場にあったこともあり、椎名氏や同じ守護代（射水・婦負郡）の神保氏とは一線を画す、独自な位置を占めたのであった。

上市町はその土肥氏の支配領域の中心部にあたる地域であり、「土肥氏ゆかりの町」と言っても過言ではない。土肥氏の足跡はそのまま中世の上市町の歴史であり、土肥氏を抜きにしては上市町の中世史を語れないからである。天正11年（1583）、足かけ2年に及んだ佐々成政との攻防戦を戦い抜き、ついに土肥氏は弓庄城（現上市町館）を去ったが、これによって上市町域の戦火はやみ、一つの時代が終ったのである。

現在、上市町域にはこの弓庄城をはじめとする中世の城館跡が8ヶ所（弓庄城・護摩堂城・郷柿沢館・稲村城・千石山城・茗荷谷山城・柿沢城・郷田砦）存在するが、そのほとんどは土肥氏関係のものである。この内、郷柿沢の館跡は早くより町の史跡に指定され、現在に至っている。ほ場整備事業の急速な実施により、平野部の中に残っていた多くの城館跡が消滅した今、上市町に残る郷柿沢館跡は中世の武士の居館遺構として貴重である。過去、上市町の城館については『上市町誌』（1970）や『越中の古城』（塩照夫著、1972）などで簡単に紹介してきた。その後、筆者が『日本城郭大系』第7巻（1980）の中で各城館の文献史料を整理し、立地や造構・構造を分析する作業を行った。その折、前述の郷柿沢館や郷田砦、また関連する日中砦（現立山町日中）の実測図を作成し、弓庄城については縄張をつかむため古い地図を掲載した。残念ながら、高所にある千石山城については踏査の機会を得られぬまま、簡略な記述にとどめたのであるが、このたび、上市町教育委員会より町独自の調査報告書作成の依頼があり、はからずも『大系』刊行後13年ぶりで当町の城館について取り組む機会を与えられた。前述のように鎌倉期以来、戦国末期に至るまで約300年余りにわたり、途中何度も激動の時代を乗り越えた土肥氏は、東の椎名氏と西の神保氏の間にあって、「土肥氏流」の城郭をいくつも構築した。それは特に山城において顕著であり、他の地域には見られない特徴がいくつも見出され、それが当地域の山城の「魅力」ともなっている。

本報告書では、上市町域に所在する城館跡のすべてについて、関連する文書や江戸期の書上類を可能な限り収録するとともに、山城については造構の概念図を掲載することにより各城館の性格や特徴を浮きぼりにするよう努めた。これによって、千石や大岩などの山間部も含めた上市町

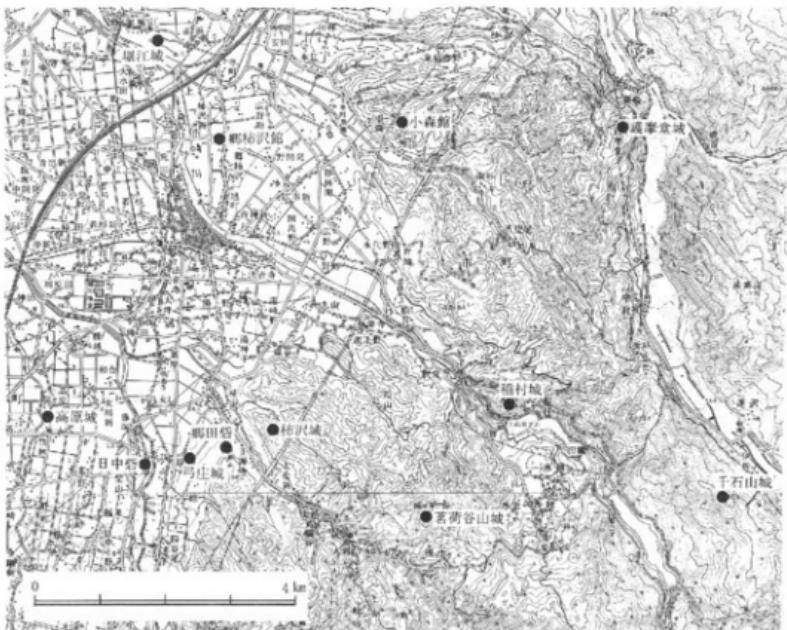


図1 上市町周辺の城館

の中世の実像がより鮮明な形で浮び上がるはずである。また、町域外ではあるが、隣接する滑川市の小森館や立山町の日中砦・高原城についても、地理的・歴史的な関係上、あわせて述べることにした。本書によって町内外の方々が郷土に残る中世の城館跡について理解を深められ、土肥氏をめぐる郷土の歴史に対し一層の愛着を抱かれるなら、幸いである。

1 護摩堂城

上市町の北端に位置する護摩堂集落の北東、滑川市との境を成す標高487.4mの城山山頂部を中心に築かれた山城。護摩堂集落からの比高は約110m、また滑川市の糞輪集落からは約390mを測る。城下集落としては位置的に近い護摩堂の方がふさわしい。山頂からは北方に松倉城、水尾山城、升形山城など椎名氏の城郭群がよく見え、これら城郭群との連係の緊密さがうかがえる。また、滑川などの平野部もよく望むことができる。山上一帯はほぼ良好に遺構が残るが、送電塔により一部が改変されていることが惜しまれる。山上部の東西両面は急峻な斜面で、東側下には早月川が流れる。北側も急な下りの尾根となり、南側の尾根続きだけが特に攻撃を予想される方向となる。

城の縄張は図2に見るとおりで、南東から北西に向けて伸びる尾根上に郭群が築かれている。主体部は現在送電塔の建つ峰の一帯で、この付近を主郭（A郭）とし、東側（早月川側）に1段（D郭）、西側（護摩堂集落側）に3段の腰郭（B・C郭）や削平面を設ける。この内、西側に対しても特にA・B・C3郭が階段状に連なり、居住性も十分にあったとみられる。主郭の南端のピークは方形（上部は4.4×7.8mの広さ）で、この南側に掘られた大堀切（No.4、上幅14m、主郭側の深さ6.7m）をはさみ、南方の尾根続きを一段高い所から見下ろせる。おそらく南面を守る橹台の跡であろう。主郭の広さは全体として22×89m程度あり、南北に連なる三つの区画から成る。まず南端は前述の橹台を中心とした防御主体の区画。中央はその北側下にある、東西両面を土塁で囲んだ一画である。ここは主郭の内部でも中心となる居住空間（約14m四方の広さ）のようである。また北端は北に長い区画で、東側のへりには土塁が続く。この区画の南部（主郭の中央）は送電塔の建設により削られている。

主郭の西側下には3段の削平面が連なるが、上段のB郭は幅5~8.5m、長さ61mで、内部に3段の段差を設ける。この郭の南端付近には、直径2.3mの井戸跡とみられる穴が埋った状態で残る。中段のC郭は幅4~7m、長さは47mで、南側のへりが少しだらだらとなって欠けている。下段の削平面は幅3.5~4m、長さ29mを測り、上の2段に比べ幅が狭く、細長い。一方、主郭の東側下にある腰郭（D郭、17×30m）には南部に上幅6.5mの空堀状（No.3）の遺構も見られる。

これは南側から敵が廻り込むのに備えたものであろう。この郭の北端はそのまま主郭直下に沿って細く伸び、さらに一段下に幅4~6.5mの帯状の削平地が付随する。これら主体部の南側は前述の大堀切、また北側は尾根筋の先端を切り落とす形で画されている。この箇所（図2中No.2の地点）には以前、電力会社の施設が設けられていたとみられるが、地形から見て、もともと堀切が存在した場所と考えられる。尾根は



護摩堂城跡遠望

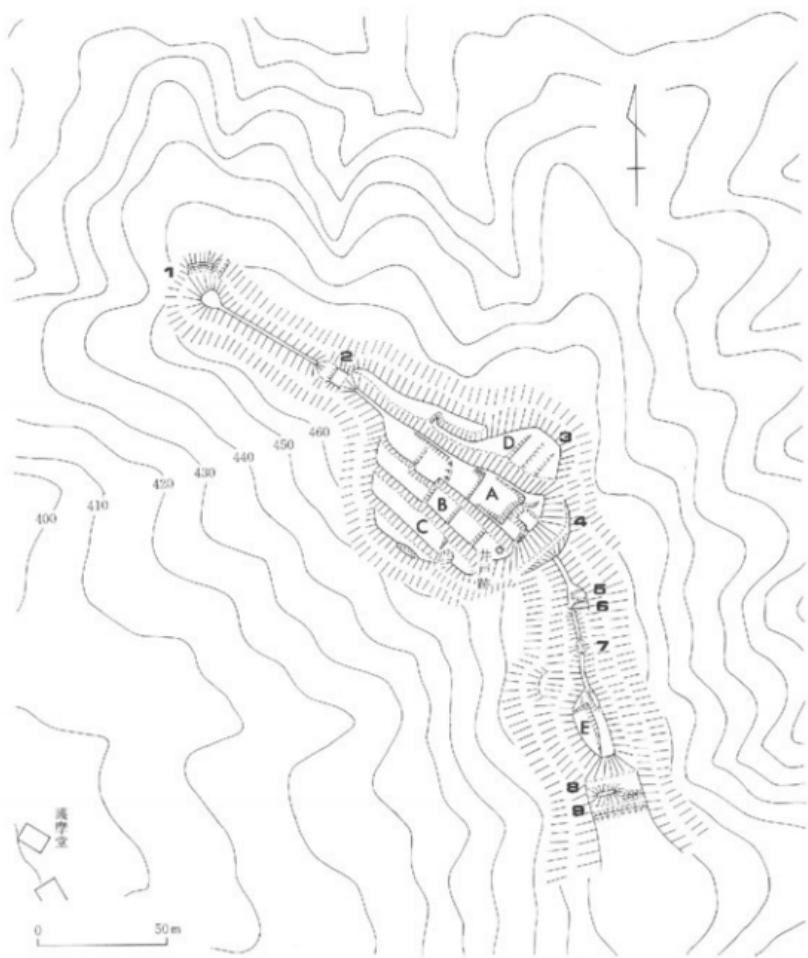


図2 護摩堂城遺構概念図(A～E…郭、1～9…堀切)

そこから水平のやせ尾根となって、三角点のある北の先端部まで伸びる。先端部は7×7mの広さの削平面で、ながめがよく、物見台として使われたとみられる。しかし、単なる物見台ではなく、この北側6m下には浅い堀切(No.1)と小さな堅堀によって組み合わされた防御施設があり、城域北端部として一応の守りはなされている。そして、ここから北へは急な下りの尾根となる。



主郭南側の大堀切（No.4）



井戸跡とみられる穴

の一角を形成する意図だったのであろう。全体的に見て、南面の守りが固いことがそれを裏付けている。築城時期については、堀切の壮大な規模から見て、戦国後期であろう。

ところで、当城の城名について、江戸時代の書上類には大半が「護摩堂（村・山）古城」・「護摩堂山城」・「護摩堂（村領）館」などと記し、一部に「蓑輪村・護摩堂村・東福寺村入合山之内城跡」と記したものが見られる。後者は地籍上の位置を記したものであり、一般には「護摩堂城」と呼ぶのがふさわしいと思われ、ここでもその城名を使用する。なお、『越中志微』が当城を「蓑輪城跡」としているのは、伝承されている城主名が蓑輪氏であったことに引かれたものとみられる。

次に、江戸時代の書上類に記された内容を見ていきたい。

- A 一、蓑輪村、護摩堂村、東福寺村入合山之内城跡御座候、蓑輪五郎左衛門居住之由申伝候、只今、柴山_ニ成居申候₍₁₎
- B 一、護摩堂村古城 蓑輪平左衛門尉_ヲ云人居住之由₍₂₎
- C 一、護摩堂村領館跡者、先年右椎名右衛門尉様御家老三浦五郎左衛門様御居住之由申伝候、年号之儀相知不申候、尤右場所當時柴山_ニ相成居申候₍₃₎
- D 一、護摩堂館跡 複摩堂村領、東西拾五間程、南北四拾間程、□山統_ニ御座候、且又南北六拾間程、幅式間程之所馬場之由_ニ御座候、當時、柴山_ニ相成居申候、椎名右衛門尉殿御

さて、主郭南側の大堀切（No.4）の南はやせ尾根が続くが、約50m先の地点に尾根の西側を削る形で削平地（E郭、6×20m）が設けてある。位置から見て、城域の南端部を守る出丸であろう。ここと前述のNo.4堀切との間には、途中に二重堀切（No.5～6）が設けてある。いずれも浅く小規模なものであり、上幅はNo.5が3.5m、No.6の方が2.5mを測る。この南にはもう1ヵ所、やせ尾根を切る形でNo.7の堀切（上幅5m、深さ1.3m）が設けてある。なお前記出丸の南側は高さ6.5mものの切岸でそり立ち、主郭南側の堀切とともに南面の大きな守りを形成する。この出丸南側も二重堀切（No.8～9）となり、中央の高さ3mの土壘をはさみ、上幅13m（No.8）と7m（No.9）の堀切が連続する。

比高も大きく峻険な山上に、このように防御が堅固で、居住性も考慮した山城を築いたのは、堀切などの規模から見て、松倉城郭群

家老三浦五郎左衛門殿御住居之由申伝候、年号相知不申、鹿熊落城之館一時_ニ落城_ヲ申伝候⁽⁴⁾

E 護摩堂 羿輪 〔※割注〕二名一蹟也。加積郷翼輪村領にて、護摩堂・東福寺と三邑交地の山中にあり。今遺跡採柴の地と成りて不分明と云ふ。〔※本文〕翼輪平太左衛門居せりといへども、無伝。〔※割注〕一本作五郎左衛門。⁽⁵⁾

規模については、Dの史料が詳しい。東西15間程は主郭南端部の東西幅、南北40間程は主郭北端部の細尾根部分を除いた数値にはほぼ合致する。これに対し、「馬場」跡にあたる南北60間もの長い平坦面はどこを指すのか不明である。あるいは、主郭東側下に続く帯状の削平地にあたるのであろうか。城主については、大半の史料が翼輪五郎左衛門（平左衛門尉・平太左衛門）の名をあげる。別に三浦五郎左衛門の名をあげる史料もあるが（C・D）、この「三浦」は「翼輪」が転訛して伝えられたものであろうか。とすれば、城主は本来、北麓の翼輪を本拠とした土豪だったともみられる。

またC・Dから、城主は松倉城主椎名氏の家老で、同城落城の際、一緒に落城したと伝えられている。これによれば、当城は松倉城の南を守る支城としての役割を果たしていたとみられる。松倉城と当城の間は直線距離で約3.5kmを隔てるが、互いに相手の城を視認できる位置にあることから、両者が本城－支城の緊密な関係にあったことはまず間違ないとみられる。

註

- (1) 宝曆14年新川郡古城跡名所旧蹟等書上申帳（金沢市立図書館蔵）
- (2) 越中古城記（同前）
- (3) 文化13年古城跡併館跡由来所伝之趣書上申帳（同前）
- (4) 文政元年城跡館跡由来申伝之趣書上申帳（同前）
- (5) 富田景周『越登賀三州志』故墟考（以下、「三州志」と呼ぶ）

2 郷柿沢館

現上市川東岸の西養寺境内が館跡であり、町指定史跡となっている。土壘は一部削られているが、周囲の堀跡とともに遺構をほぼ良好に残しており、本県における戦国期の平地方形館跡として貴重である。プランは図3に見るとおりで、全体の規模は堀も含め85×85m程度である。現在、出入口（虎口）は西側の北寄りに1ヶ所、また南側に2ヶ所見られるが、この内南側の西寄りにある1ヶ所は後世の開口部であろう。また、現在の寺の正門前（西側）にある堀の内、南半部は後世に幅が広げられたものとみられる。平均的な幅の上幅は南・北・西の三方で6～7m、東側が5m程度である。四方をめぐる土壘の内、西側の南半部が高さも高く、上幅も広い。おそらく西南隅の土壘上には櫓などが存在したであろう。同様に他の三方の土壘の隅にも櫓が存在した可能性がある。ただし、北東及び北西隅の土壘は後世の削平などにより明確な痕跡はない。注目されるのは、南面東側の堀の食い違いであり、土橋を渡って虎口に入る進入路もカギ形に折れてい

る。防御上の配慮であろうか。また、そこから東側にかけて土塁の外側基部に大走り状の細長い段がめぐっている。幅は1.5~4m程度である。

次にこの館について記した書上類を見ていきたい。

- A 一、柿沢村領之内_ニ城跡御座候、土肥孫十郎居住之由申伝候、只今ハ田畠_ニ仕置申候⁽¹⁾
- B 一、堀ヶ所 館跡、但柿沢村領之内_ニ御座候、館主_ニ滅亡之年号相知レ不申候、唯今ハ作所_ニ罷成、土居之形_ニ残り居申候、(後略)⁽²⁾
- C 一、柿沢村領館跡、先年土肥源太郎様御居住之由_ニ元亀・天正之頃落城之由申伝候、尤右場所當時淨土真宗西養寺居屢敷_ニ相成居申候⁽³⁾
- D 一、柿沢村古墳 平地東西廿六間、南北三拾五間、壠式重幅式間宛、土肥孫太郎居住之由、土肥之一族_ニ錄信公越中攻之時没落之由⁽⁴⁾
- E 一、江柿沢村館 館付城か、平場東西武拾六七間、南北三拾五六間、壠一重幅式間斗⁽⁵⁾
- F 一、郷柿沢村館跡之事 此館跡と云ハ土肥弥太郎籠たる城跡也、謙信此因_ニ乱入の時落城す、本丸東西三十間斗、南北四拾間斗、平地にて壠二重有、幅式間斗と見ゆる也⁽⁶⁾
- G 一、江之柿沢ハ數年之館也、其時土肥・椎名在番シテ堀江ノ平城ヲ筑居ス、所々取合懼刻、川上稻村_ニ城ヲ掩籠城セシカ終ニ景虎ノ手_ニ属ス⁽⁷⁾
- H 一、柿沢館跡 柿沢村領_ニ東西三拾五間程、南北三拾八間程、東西南三方_ニ幅式間程之堀形御座候、當時一向宗西養寺居屢敷_ニ相成居申候、先年ハ土肥弥太郎殿御住居之由_ニ元亀・天正之頃落城之由申伝候⁽⁸⁾
- I 一、郷柿沢【※割注】在加積郷。弓莊にも柿沢の号あるゆゑ、之を郷柿沢とよびて其の名を分つ。遺迹今東西二十五間、南北三十五間、小山也。旧註には、東西二十六間、南北三十五間、塹二個、幅各二間、平地とあり。可較考。【※本文】邑伝に、土肥孫十郎居たりと。⁽⁹⁾

これらの史料からもわかるように、館主については土肥氏と伝えられ、戦国期に土肥氏支城群の一角を形成していたことがわかる。特に史料Eでは「稻村付城か」と記され、上市川の上流にそびえる稻村城を当館の詰城（奥城）ではないかとしている。一方、現上市川の下流には堀江庄の支配拠点であった堀江城や有金館が存在し、当館はその堀江・有金と稻村・千石山（詰城群）の中間に位置する形になる。言わば両者を結ぶ「つなぎの城」としての役割を果たしたものであろう。なお、参考までに当館から北方の堀江城までは直線距離で1.8km、また南西の稻村城までは6kmを隔てる。

ところで、館主については、史料A・Iが土肥孫十郎の名をあげ、史料Cが土肥源太郎、史料Dが土肥孫太郎、史料F・Hが土肥弥太郎の名をそれぞれあげる。また、いくつかの史料が上杉謙信の越中進攻の際、あるいは元亀・天正の頃に落城したと伝えるが、根拠は不明である。こうしたなかで、史料Gが当館を数年の短命な館で、土肥氏と椎名氏が共に在番していたと伝えるのは、興味深い。寺伝によれば、西養寺は松倉城主椎名康胤の子兵部によって開基されたと伝えられ、松倉出身のため寺号を「松倉山西養寺」と称する。兵部は一族・郷党を率い石山合戦に加わり、帰国後、一時万念寺谷（現滑川市本江）に住み、のちに郷柿沢に移ったという。当時、館に

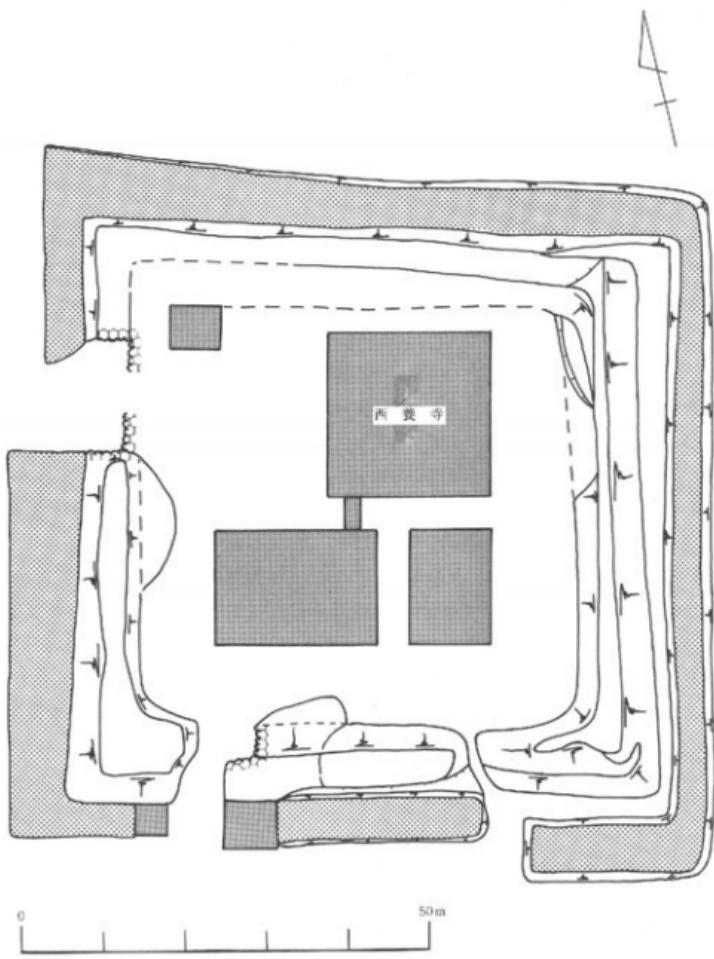


図3 塚林沢館跡実測図(1979年作成)

は土肥氏がいたが、佐々成政との戦いに際し、病弱のため出陣できなかった。この時、僧籍に入るか帰農するか、どちらかを選べば一命を許すと言われ、結局帰農の道を選び、門前紋兵衛と名乗った。その後、紋兵衛は館の前に住み、館跡には椎名兵部（法名、西顕）を招請して西養寺建立の一役を担ったという。以上の寺伝は、前記の史料Gが土肥・椎名による在番を伝えている点にやや符合するところがあり、注目される。

館主として伝承される者の内、土肥弥太郎は天文24年（1555）6月堀江庄祇園社に木造獅子頭の寄進を行っていること¹⁰。また、土肥孫十郎については天正6年（1578）に他の史料上で名が見えること（史料J参照）などから、天文～天正初期頃の存立期間を一応推測できる。この内、土肥孫十郎に関わる史料を次に掲げる。

J 土肥孫十郎分任兼約之筋目、渡置候、御知行不可有相違、但諸役等可為如前々者也、仍如件
天正六年

八月十六日

河田長親
禪忠（花押影）

右衛門佐殿

これは上杉氏の部将で、越中国内の上杉方を統括していた河田禪忠（長親）がこの年3月の謙信急死後、右衛門佐（河田惣五郎）に与えた知行宛行状である。天正5年、謙信は越中・能登・加賀一帯を制圧し、各地の国人層を服属させたが、翌6年の謙信急死によりそれら国人層に大きな動搖が生じ、いち早く織田方に走る者が相次いだ。土肥氏の場合、同年5月16日付けで織田信長の部将菅屋長頼より返書が有沢小太郎宛に出されており¹¹、この書状によって土肥政繁が5月16日以前に織田方へ走っていることが明らかとなる。こうした越中國人層の離反に対する上杉方の処置の一つが、前掲史料Jであるとみられる。そしてJの知行宛行状に見える「土肥孫十郎」こそ、郷柿沢館主と伝えられる土肥孫十郎を指すと思われ、「土肥孫十郎分任」とあるのはその所領なのであろう。とすれば、孫十郎は天正6年3月以前は上杉氏に属していたが、3月の謙信急死により弓庄城主土肥政繁と同様、織田方に走ったのであろう。河田禪忠はこの動きに対し、孫十郎の所領を没収し、これを右衛門佐に与えたとみられるのである。ともかく、この史料Jによ



館跡西側の堀

って土肥孫十郎の天正6年前後における存在が確認できよう。なお、郷柿沢館の存続は遅くとも天正11年の土肥氏の越中退去をもって終ったとみてよい。

次に史料Iが当館跡の立地について「小山也」と記しているのは、館の存立当時、付近が小高い微高地であったことを示すのであろうか。また、館跡の現況は周囲に堀が一重だが、史料D・F・Iには二重と記されている。事実とすれば、かなり厳重な防御を施していたことになるが、今のところその点を確認す

ることはできず、今後の発掘調査による成果などを待ちたい。あるいは全面ではなく、一部の側だけが二重だったのかも知れない。史料Ⅱには、北側を除く三方に「堀形」があるとも記すが、これは書上に記された文政元年（1818）当時、北側の堀跡が他の三方に比べ、かなり埋まっていたことによるのかも知れない。ところで、館跡の規模について、各史料はさまざまに記すが、この内20間台は土塁内部を、また30間台は土塁の外側までを含んだ数値を示すとみられる。現在の実測値に比較的近いのは、この内、史料Ⅱの数値である。

註

- (1) 宝暦14年新川郡古城跡名所旧蹟等書上申帳（金沢市立図書館蔵）
- (2) 同上（桐沢家文書）
- (3) 文化13年古城跡併館跡由来所伝之趣書上申帳（金沢市立図書館蔵）
- (4) 越中古城記（同前）
- (5) 越中古城館趾記（富山県立図書館蔵）
- (6) 越中古跡粗記（金沢市立図書館蔵）
- (7) 越州新川郡郷庄古城（同前）
- (8) 文政元年城跡館跡由來申伝之趣書上申帳（同前）
- (9) 『三州志』
- (10) 『富山県史 史料編Ⅱ 中世』銘文抄44号
- (11) 因輪志 二十七
- (12) 土肥家記

3 稲村城

上市川上流の上市川第一ダム北側にそびえる城山の山上に築かれた山城である。標高は348m、比高は東の稲村側で108m、西の駿泉寺側で228mを測る。上市町の平野側から見ると、円錐形で険しくそり立つような山容が望まれる。山の四方は険しい急斜面で、東側を除く三方は深い谷に面した要害である。山上からは上市の町並や千石山城跡などを望める。この内、千石山城は堀江城の詰城と伝えられている城であり⁽¹⁾、位置的に見ても稲村城と密接な関係にあったはずである。参考までに、この稲村城と千石山城は直線距離で約3.5kmを隔てる。

城の縄張は図4のとおりである。まず山頂部の広大な削平面（40×43m）が目に入るが、ここが主郭（A郭）とみてよい。これだけ高く険しい山上に、このように広大な平坦地を有する山城は周辺にも少なく、注目されてよい。郭の西端部には高さ1.5mのほぼ方形の高台が設けられている。ここは平野側に面するところから、物見などを目的とした櫓台の遺構であろう。上部は約3m四方の広さがある。また、櫓台の東南には抜け穴跡と伝えられる穴が1ヶ所存在する。

険しい山上のためか、縄張としてはいささか単純で、あとは山頂部から張り出した尾根筋に若



福村城跡遠望



主郭西端の櫓台

干の削平面を設け、郭を作っている。まず、前述の櫓台下より西方に細尾根（幅2～2.5m）が42mにわたって伸び、その先端部に大小2段の削平面から成るB郭を設ける。主郭に近い側は20×9m、その先は一段低く6×3.8mの広さがある。この郭は西方に対する出丸の役割を果たしたものであろう。尾根筋はその先で急峻に下っている。一方、主郭の南側にも5～6m下に7.2×9mの広さの削平面（C郭）が設けてある。両側は深い谷、また先端部から先も急斜面となって下っている。

比高の小さい東の稻村側に対しても、2本の尾根が伸びているが、このうち南側の尾根筋には2ヶ所の堀切（No.1～2）を設け、下から登る敵を防いでいる。これらはいずれも上幅が5.5m程度だが、深さは浅いものである。No.1の堀切の北側には少人数を配置できる小さな削平地（10.5×5m）が付随する。

尾根道の途中に設けたチックポイントであろうか。また、もう1本の北側の尾根筋には途中に高さ2.5mの切岸（人工的な急斜面）を入れ、段差を設けている。これも下から登る敵に備えた防御上のものである。

以上、全体の構造をながめてきたが、何よりも山頂部に広大で良好な削平面を有することが注目される。高所でありながら、十分な居住性を備えていたと考えられる。これに対し、まわりが崖に近い急斜面のためか、特に大がかりな防御施設が見当たらないのも特徴的である。たとえば、堀切は2ヶ所とも簡素なものであり、茗荷谷山や千石山などと比べると、いかにも貧弱な感を与える。戦国中～後期の築城・使用と考えられる。

次に、稻村城について記した江戸期の書上類を見てみよう。

- A 一、稻村古城 稲村領東西三拾間程、南北式拾間程、先年土肥左衛門殿御居城共ハ上肥源七殿御住居とも申伝候、年号之儀、相知不申、當時ハ草山等三相成居申候⁽²⁾
- B 一、稻村 山城 四方山ノ中、谷合ニ丸山にて御座候、四方きれ道きびしく、麓ニ眼目川流レ申候、然共巡リノ山高ク、近ク御座候、土肥名字之もの有之由申候⁽³⁾
- C 一、稻村山古城 三方切谷、西北之尾続ニ西山之段之所ハ家中屋敷之跡モ相残、土肥源七郎居住之由⁽⁴⁾
- D 一、稻村古城 土肥源七郎付城之由⁽⁵⁾

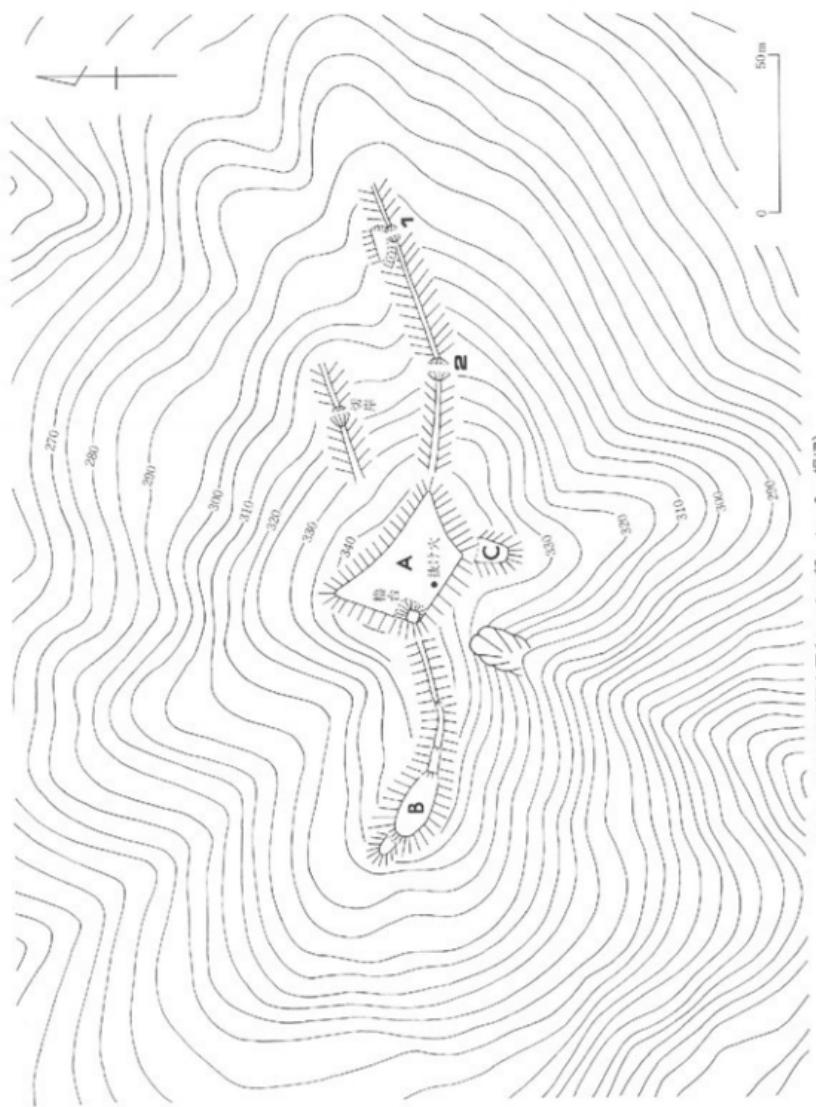


图 4 稲村沟流域概念图 (A—C…坝、1—2…堤切)

E 稲村 〔※割注〕在加積郷稻村領。四面山環り聳ゆ。其の内城山は円にして離る。道陥にして堅岡也。一説三面断塹、西北換山、山腹壇ある處家臣の第跡あり。又云ふ、平地にして東西三十間、南北三十八間、二重塁幅二間。自富山卯方六里、自眼目村半里奥也。土人呼之堀江奥城。〔※本文〕邑伝に、土肥源七郎居たりと。〔※割注〕愚按、下文に所謂稻村次郎左衛門は、初め此の堡主なるによりて、稻村と称せるなるべし。されば下文千石山の書伝と契符す⁽⁶⁾。

これらの文献史料の内、地形・立地について記したB及びEの記述は現状によく一致し、正確である。又、規模について記したA及びEの東西・南北の間数は、おそらく主郭部分にあたるとみられるが、Aの南北値以外は現状よりも多少大きい数値となっている。注目されるのは、Eに二重の堀の記述があることで、これはおそらく東側斜面に残るNo.1とNo.2の堀切を指すのであろう。その幅を2間としているのは、堀底の下幅を記したものと見られる。

城主については、大半が土肥源七郎をあげるが、Aは土肥左衛門なる者をあげている。いずれにせよ、土肥氏が城主であったことは明らかであろう。土肥氏の支城群の中での位置については、「越中古城館跡記」⁽⁷⁾が郷柿沢館を稻村城の付城（支城）ではないかと記し、またEの『三州志』が稻村城を堀江城の奥城（詰城）とする伝承をのせており、現上市川沿いの両城館との緊密な関係が推測でき、それら平野部に築かれた城館の詰城として存立していたことが十分うかがえる。参考までに、稻村城から郷柿沢館までは直線距離で約6km、さらに堀江城まではそこから1.8kmを隔てる。

註

- (1) 文化7年新川郡古城跡井館跡御付札之ヶ所詮議之趣証書仕上ヶ申帳（金沢市立図書館蔵）に「堀江村之奥城、申由」とある。
- (2) 文政元年城跡跡由来申伝之趣証書上申帳（同前）
- (3) 越中四郡古城跡略記（同前）
- (4) 越中古城記（同前）
- (5) 越州新川郡郷庄古城（同前）
- (6) 『三州志』「稻村」の項
- (7) 富山県立図書館蔵

4 千石山城

土肥氏支城群の中で最高所の山中に築かれた山城。標高757m、比高は約500m（千石側より）にも達する。山上からの眺望はさすがにすぐれているが、麓の集落からは遠く、ほとんど隔絶している。北方に護摩堂城や松倉城、西方に茗荷谷山城、また南東に鷺岳を間近に望める。

城は山頂部に2段の削平面（郭）を設ける。主郭となる上段のA郭は東西55×南北19mの広さ

を有し、西側にやや低い高まりがあり、ここに三角点が置かれている。一方、東側は低くなってしまっており、東端付近に直径3mの丸いくぼみが認められる。位置などからみて、水源用の井戸または水溜の跡であろうか。主郭の西側は高さ4mの急峻な切岸となっており、その下に幅5~6.5mの削平面（B郭）が北側から西側にかけてめぐらされている。この郭の東端は上幅8.6mの堀切（No.4）によって断ち切られている。山頂部の周囲には南西と北東方向に向けて小尾根が張り出しているが、前者の尾根に2ヶ所、後者の尾根に1ヶ所の小削平地が設けられている。この内、北東方向の細尾根は先端で切り落とされ、崖となっている。

ところで、当城最大の防御施設は南東と北西方向の主尾根沿いに設けられた堀切群である。この内、南東方向にはNo.1~3の連続した堀切があるが、規模はNo.1が上幅7mに深さ3m（山頂側）、No.2が上幅7.5mに深さ3.7m（同前）、また主郭直下にあるNo.3は上幅15.5mに深さ6.3m（同前）を測る。特にNo.3は堀底から山頂側を見上げると、そびえ立つような急斜面となっており、守りの厳重さで寄せ手を圧倒するかのようである。これに対し、北西方向に伸びたやせ尾根を約100m余りたどると、尾根筋が北へと曲る地点で先端部が高さ9.7mもの段差で切り落とされ、その下にNo.5とNo.6の堀切が連続して設けられている。この内、No.6の堀切の西側はそのまま斜面を24m下って深い堅堀となる。これは尾根の西側が東側に比べゆるい傾斜であるため、敵がまわり込むのを防ぐために掘られたものであろう。また、尾根の頂部で上幅7m、深さ3.4m（南側）を測り、南側が段差をもって高くそびえる。これら二重の大規模な堀切や堅堀などによって、この北西方向の尾根筋が完全に断たれる形になる。特にNo.5の堀底から南側の尾根を見上げると、そぞり立つような切岸を見る者を圧倒する。

次に千石山城について記した文献史料を見てみる。

- A 一、千石村山ニ後城跡有之、堀江村之奥城ト申由、但僉議仕候處⁽⁴⁾當時城山と唱候得共城形ヲ無御座此柴山ニ御座候、（後略）⁽¹⁾
- B 一、千石山城跡之事 此城跡、土肥弥二郎別荘にして、堀江の城落て此城に籠り、爰にても戦負て後、福村百姓次郎右衛門宅ニ三年隠れ居て、夫々飛州へ立越へしと此辺の里人物語せしに、又其孫三郎加州へ來りけるにや、今加州に其子孫有て禄六百石給わりて家繁昌



千石山城跡遠望



主郭西側の切岸とB郭

する也。(後略) ⁽²⁾

C 一、千石山古城跡 土肥氏持城之由⁽³⁾

D 千石山 ^[※割注] 在加積郷千石領。今平夷の所僅かに存せり。〔※本文〕 稲村堡の稻村次郎右衛門此の城に米居せるか。邑伝に、堀江陥城の時、土肥弥太郎此の城の稻村次郎右衛門に寄りて三年隠れ、其の後飛州へ去ると云ふ。〔※割注〕 一説。弥太郎走稻村。其後降成政云。⁽⁴⁾

これらの書上類によると、まず当城が土肥氏の持城であり、堀江城（現滑川市）の「奥城」（万一の際に立て籠る詰城）と伝えられていたことが知られる。Bが当城を堀江城主の「別荘」と伝えているのも興味深いところである。いずれにせよ、平野部の中にある堀江城との関わりについて、同城が落城後、城主土肥弥二郎がこの城にて籠り、さらにここでも戦いに敗れたため、稻村の百姓次郎右衛門宅に3年隠れ、それから飛騨へ逃れたとする伝承（B）、また堀江落城後に城主土肥弥太郎が当城の稻村次郎右衛門のもとに寄り、3年隠れたのち飛騨へ去ったとする伝承（D）の2説があげられている。この内、Dについては「稻村堡」（=稻村城）主の稻村次郎右衛門がこの城に来て、居住していたものかと推測している。しかし、Dの伝承はBの古い伝承から千石山城部分が欠落して組み立てられた可能性があり、稻村次郎右衛門（Bでは稻村の「百姓次郎右衛門」）を元稻村城主で、千石山城に居住していたとする考えには同意し難い。いずれにせよ、土肥氏の落ちのびたルートが、堀江城→千石山城→飛騨として伝えられているのは興味深い。なお、堀江城主として名をあげられている土肥弥太郎は、天文24年（1555）6月堀江庄祇園社に木造獅子頭の寄進を行った武将としても知られている。⁽⁵⁾

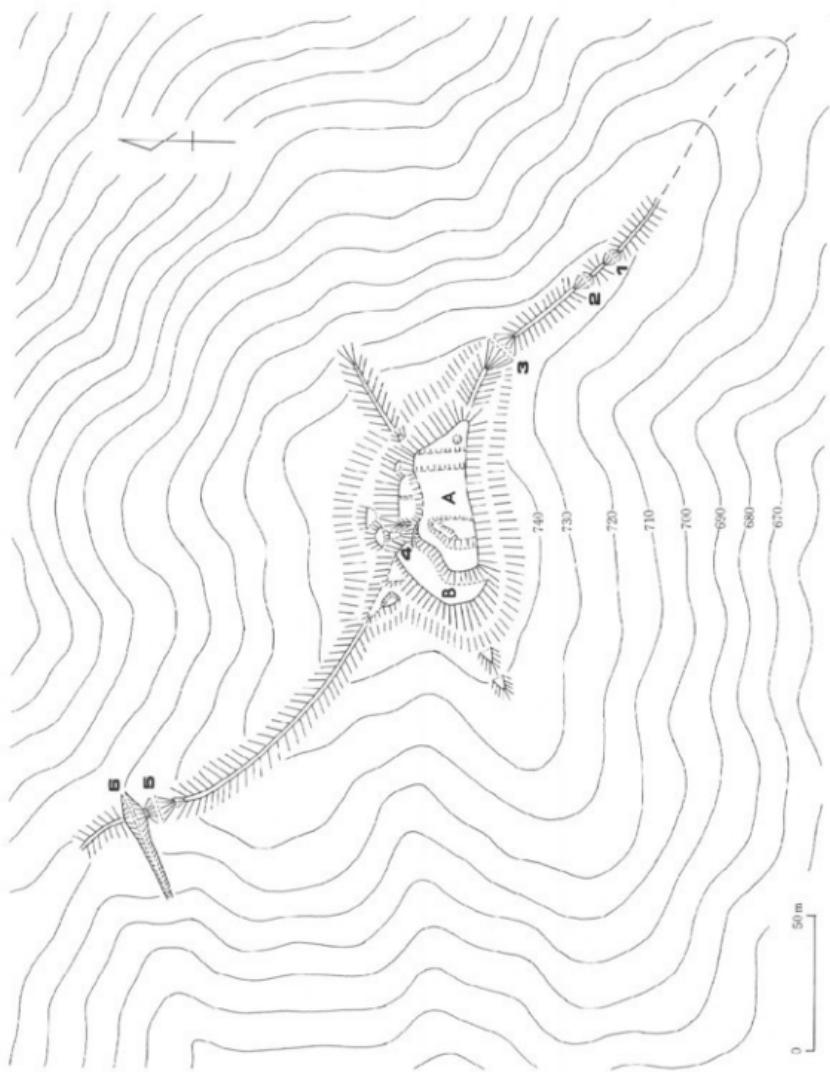


壮大な堀切（No. 3）



南端の堀切（No. 1）

圖 5 千石山城遺構概念図(A-B…郭、I-I…堀切)



この他、Aによると、城跡の存在する山が文化7年（1810）当時、「城山」と称されていたこと、またDには「平夷の所」（平坦地）が僅かに残ると記されているのも注目される。

それにしても、平野部から遠く隔たって、このような高所に大規模な堀切を連続して設けた繩張りには驚かされる。上市川上流の千石と早月川上流の伊折・蓬沢を結ぶ山越えルートを押さえるとともに、それら二つの谷筋の上流域を見下ろし、支配していこうとする意図が読み取れる。また、隣接する椎名氏支配領域との境界線上に位置する「境目の城」としても、重要な役割を果たしたであろう。しかし、伝承によれば、土肥氏はこの奥城さえも支え切れず、落ちのびたことになる。

築城の時期は、大規模な堀切遺構から見て、戦国後期であろう。そのことは天文年間の土肥弥太郎との関わりからも裏付けられる。

註

- (1)文化7年新川郡古城跡井館跡御付札之ヶ所證議之趣脇書仕上ケ申帳（金沢市立図書館蔵）
- (2)越中古跡粗記（同前）
- (3)柄波・射水・新川郡古城跡書上（富山県立図書館蔵）
- (4)『三州志』
- (5)『富山県史 史料編Ⅱ 中世』銘文抄44号

5 弓 庄 城

白岩川東岸の河岸段丘上に築かれた城である。ここは戦国末期に土肥氏の本拠となり、佐々成政との攻防戦の末、天正11年（1583）に土肥氏が城を明け渡して退去した城である。現在、城跡一帯は水田となり、当時の面影をしのばせるものはないが、上市町ゆかりの国侍・土肥氏の本拠地跡として町の史跡に指定されている。城名の「弓庄」は南北朝～戦国期に当地に存在した庄園・井見庄にちなんでとみられる。城は白岩川に近く、城跡西側の一段低い所に「舟着場」という地名が残ることから、古くは同川を利用した水運の便があったとみられる。陸上交通の面では、江戸時代に滑川から堀江・上市・白岩・松倉を経て芦崎寺に至る立山参詣道この城跡のそばを通過していた⁽¹⁾。この道は、城跡のある館村以南では主に白岩川沿いをたどるものであったが、江戸時代以前においても滑川と芦崎寺を結ぶルートとして使われていたとみられ、城はこうした水陸交通の要衝に位置することになる。

土肥氏は鎌倉期に堀江庄の地頭代を勤め⁽²⁾、以後、南北朝期の土肥中務入道心覚⁽³⁾らを中心にもう一度同庄の堀江に本拠を置き、在地領主化をとげた。堀江城を拠点とする土肥氏（堀江系土肥氏）は現上市川沿いに支城群を構築し、やがて新川郡西部の有力国侍として成長した。16世紀初めの永正年間には、白岩川流域の鹿王院領井見庄の代官職を得て⁽⁴⁾、同地域へ進出し、弓庄城を築いて付近一帯を支配するようになった。この弓庄系土肥氏は美作守を称し、天正年間の最後の当主は美作守政繁であった。支城群としては、柄津川右岸の高原城や大岩川右岸の柿沢城、茗荷谷山城などが築かれたが、詰城（奥城）と伝えられるのは茗荷谷山城の方である（後掲史料D参照）。

土肥氏は永正17年（1520）の新庄の戦いで神保氏らとともに長尾為景に敗れ⁽⁵⁾、一時的に衰退期を迎える。そして天文12年（1543）には、神保・椎名氏の抗争を中心とした「越中大乱」に巻き込まれ、土肥主税介が椎名方に討たれ窮地に陥った。このため、土肥氏は永禄5年（1562）頃まで池田城（現立山町池田）の寺鶴氏を頼り、そのもとで堪忍分を得ていたという⁽⁶⁾。その後、土肥政繁は上杉謙信に属したが、天正6年（1578）の謙信急死により織田信長の陣営に走った⁽⁷⁾。しかし、同10年（1582）信長が本能寺に討たれると、再び上杉氏に復属した⁽⁸⁾。上杉方も同じ頃、魚津・小出両城を奪回し、土肥氏はこの上杉方と連携を計って佐々成政に敵対する。これに対し、態勢を立て直した成政は同10年8～9月と翌年4月以降の2回にわたり弓庄城を包囲した。この時、佐々方は日中砦や郷田砦などの付城を周囲に築き、反撃する上肥方を封じ込めようとした。こうして次第に国内で孤立化した政繁は上杉方からの援軍も得られぬまま、ついに同11年7～8月頃、成政と和議を結び城を明け渡して越後へ退去した⁽⁹⁾。主だった家臣達もこれに同行して去了るため、弓庄城もこの時点で廃城になったとみられる。同年8月20日付けで成政が家臣の林助右衛門尉に対し中新屋・日置をはじめ5千俵の知行を与えていた⁽¹⁰⁾のは、弓庄城陥落に伴う戦後処理の一環であろう。

次に弓庄城について記した江戸期の書上類を見ていきたい。

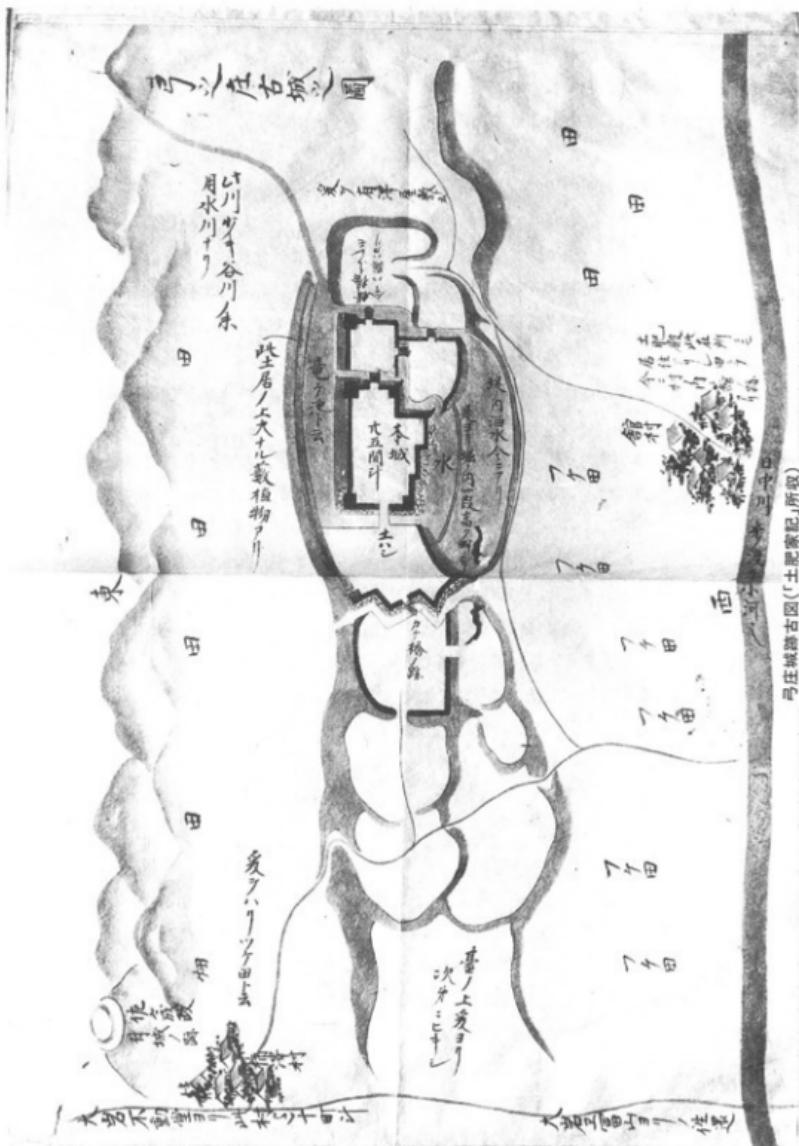
- A 一、柿沢村領之内城跡御座候、土肥美作居住之由申伝候、堀^ノ土居等少^レ残^リ居申候、大方畠^ノ仕置申候⁽¹¹⁾
- B 一、弓ノ庄ノ館村 平城、土居かたち残り有之候、北ノ方田畠、南東よりハ山ちかく御座候、弓ノ庄ト申もの有之由⁽¹²⁾
- C 一、弓庄館村城跡之事 此城跡ハ土肥美作守の城跡也、此美作守ハ謙信此国へ乱入の時越中五大将の老人也、謙信の為メに落城す、此城跡富山今道三里十七丁隔つる、平地にて四方深沼⁽¹³⁾
- D 一、弓ノ庄柿沢村ニハ土肥美作守在城セリ、若山^ノ土居亦、亦茗荷谷村大岩不動堂ノ北ノ高山ニ城ヲ築キ柿沢トカケ持也、然所^ニ佐々成政度々合戦^ニ及フ、依之美作守ノ子ヲ為質成政令和平シカ一两年過、越後景勝力臣ト心^ヲ合由、成政聞テ急當城攻ント欲ス、依之美作守カ臣等再三諫言^ヲ加フト云ヘトモ不用サヘ已^ニ及一戰、日中山端川ノ上^ニ成政出馬シテ戰^ヲ挑ム、其後美作守カ子ヲ生ナカラ疊^ニかケ美作守ミセケル、然トモ土肥が兵士等心^ヲ合^シ成政カ手^ニ不属^ニ依テ、終^ニ彼子ヲ白岩川ノ端ニシテ殺害シ成政ハ日中山端^ニ戰、作州コタヘ兼テ夜通^ニ舟^ニ乗テ春日山^ニ引取ル⁽¹⁴⁾
- E 一、弓庄館村古城 平山城、本丸東西式拾八間、南北六拾八間、堀幅式間、富山今道程三里十七丁、城主^(土肥)肥美作守越中五大将之内^ニ面候處、元亀二年三月上杉謙信公乱入之時落城之由⁽¹⁵⁾
- F 一、弓庄館村館 土肥美作守、弓ノ庄式拾七ヶ村ヲ領ス、五大将之内也、東西式拾八間、南北百拾八間、四方堀也、落城成政代と云、干今百姓之子孫有之由⁽¹⁶⁾
- G 一、弓庄館古城 弓庄館村領、東西三拾五間程、南北三拾四間程、東之方山続、西ハ切岸

四方共堀跡土居跡御座候、且東の方堀跡式筋御座候、北の方石垣体之物少宛所々ニ御座候、右城之内西南之隅ニ家老屋敷數戸唱候^レ拾間四方斗御座候、當時ハ田畠ニ相成居申候、先年ハ土肥美作守殿御居城之由申伝候、年号相知不申候^レ

- H 弓庄　〔※割注〕在弓庄内館村領。柿沢村西。平地也。土肥家記開卷に有沢伯起弓庄城図あり。可確徹。其の圖面本丸南北二十五間許とまで有りて、二・三丸間尺不記。故城の東西皆深田、其の田より東は山列し、西は日中川流る。本丸の東壇を龍ヶ池と呼ぶ。塹外の土居上に竹叢ありと記す。旧伝には本丸東西二十八間・南北六十八間（一作五十八間）、塹幅二間也。別に東へ四尺、西へ四間の深池あり。自富山三里七町（一作三里十四町）。中越古城考には、去富山五里と云ふ。又一説、南北可百間、東西可七十間、東西深田、南北地低、外郭の内土弟迹あり。石壁僅かに存す。其の余働きて田となると云ふ。〔※本文〕土肥氏数代居せり。〔※割注〕歴代の名井に代々事蹟不可考索。此の土肥は頼朝公の臣土肥次郎実平の後胤、天正の初め美作守までは新川一郡の大半を領して、弓庄に居城す。接するに能州末森に土肥但馬あり。然れども別苗也。混同すべからず。（後略）¹⁸

弓庄城のプランについては、史料Hにも引用されているように「土肥家記」所収の「弓之庄古城之図」（延宝9年=1681）が参考になる。同図によると、直線的な堤線と横矢をかけるための折を多用した「本城」（本丸）が城の中心に描かれている。内部に「廿五間斗」とあるのは、史料Hが記すように本丸の南北の長さを記したものであろうか。郭の北側と西側の二面には石垣が築かれ、四隅には櫓台が描いてある。出入口（虎口）は南北に各1ヶ所設けてあり、北が土橋、南は木の掛橋となっている。本丸の北に隣接する郭は北側に著しく屈折した堤線を設け、石垣を築いている（本丸をはじめ、この郭に描かれた石垣とは、前掲史料Gに「北の方石垣体之物少宛所々ニ御座候」と記すものにあたるのであろう）。北東隅には櫓台があり、北側中央の出入口には堀の上に木橋があったように描かれ、「カケ橋ノ跡」と記してある。この郭の北にもう1ヶ所、土塁をめぐらした郭があり、その北と西に各1ヶ所の出入口を描いている。この内、北の出入口には外部からの道が通じている。一方、本丸の南には方形の小郭があり、南東隅に櫓台がある。郭の南と西には各1ヶ所の木橋が描かれ、それぞれ外側の郭と結ばれている。こうした木橋が旧状の復元図であることは「掛橋イツレモ今ハ跡ハカリ」と記入されていることからもわかる。おそらく、この方形郭は本丸南側の虎口を守り、城兵の出撃に利用される馬出郭としての性格を持っていたのであろう。馬出郭の西側には西と南の2面を土塁で守った郭が描かれ、南には木橋を描いている。これら2郭の南側には東西2段の平坦面が連なり、館村からの道が通じている。この平坦面の南側（城外）には家臣有沢氏の屋敷があつたらしく、「爰を有沢屋敷ト云」と記入している（前掲史料Gに記す「家老屋敷」にあたるのであろう）。また、本丸を中心とした郭群の東側には東方の山から谷川の水を引き込んだ水堀が描かれ、「竜ヶ池ト云」の記入がある。この竜ヶ池の東側には堤が描かれ、「此上居ノ上大ナル蘿植物アリ」と記している。土塁などの上に植栽を施し、外から城内が見通されるのを防いだ名残であろうか。これに対し、西側は堤によって2段に分けられた水堀を描き、図の作成当時も水がたたえられていたことを示すように「堀ノ内

弓庄城跡古図(「土肥家記」所収)



溜水今ニアリ」の記入がある。城の中心部から北方にかけては、平坦面が数段にわたって続き、北部は次第に低くなっていると記す。全体的に見ると、本丸を中心として石垣や土塁をめぐらした計5ヵ所の郭が城内部分として描かれ、その外側に達する平坦面（たとえば、南側の2段の平坦面など）が外郭部を構成していたようである。

城の周囲に目を転じると、東方の山並との間には「田」や「畠」が続き、西方の「日中川」（現白岩川）との間には「ヶ田」（深田）が広がっている（前掲史料Cによると、四方に深沼があると記す）。日中川東岸の館村には上肥氏の居館があったと記され、「土肥殿此在所ニモ居住アリシ由ニテ今ニ村ノ内ニ館ノ跡アリ」とある。城の北東には「柿沢村」があり、その背後の山上には上部を2段に削った造構が描かれ、「佐々成政付城ノ跡」と記している。これが天正11年（1583）4月頃、佐々成政が弓庄城を攻める時に築いた付城（郷田砦）の跡であることは言うまでもない。また、背の下に「爰ヲハリツケ田ト云」とあるのは、成政が土肥氏から人質に取っていた政繁の子平助を見せしめのため隣にした所である。その「ハリツケ田」の地名は今も残っている。

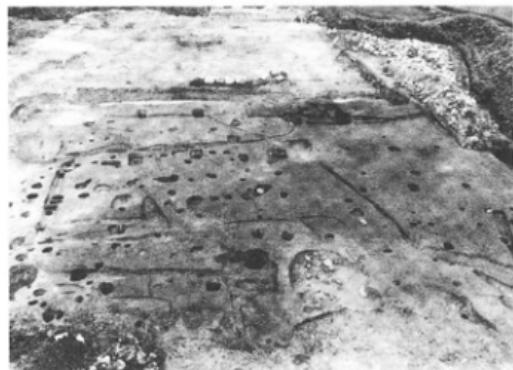
さて、江戸前期の古図から読み取れるのは以上の諸点であるが、城跡一帯では場整備事業の実施に伴い、昭和55年度から59年度の5ヵ年にわたり発掘調査が行われた。その結果については、上市町教育委員会発行による『富山県上市町弓庄城跡第1次～5次緊急発掘調査概要』（1981～1985）に詳しいが、ここでは要点だけをあげておきたい。¹⁹まず、掘立柱建物跡は1次から5次までの調査で75棟が検出された。それらは1間×1間から4間×4間までのバラエティーを持ち、中心的な時期は12～13世紀代と16世紀代の二つの時期である。溝としては、城の内外を画するものと内部を画するもの、また建物を区画するものの3種類が検出され、古図に描かれた本丸東側の竈ヶ池や西側一段下の堤（土塁）で仕切った堀などが確認された。井戸は直径約1～2m、深さ1.5～3mと大小さまざま、基本的には素掘りだが、土質の軟弱な地域では石組を施したり、木製や石製の枠をはめたものが見られる。井戸からの出土遺物は12～13世紀のものと16世紀のものがほとんどで、前者は深さ1.5～2mの浅い井戸から、後者は2m以上の深い井戸から出土する傾向を保つ。

古図によれば、城は南北に長く伸びた形で描かれるが、おおまかに見て、南半部の本丸周辺が16世紀代（ただし、それ以前の造構を整地した上に構築）、北半部が12～13世紀代の造構を中心としており、土肥氏時代の弓庄城の範囲は古図の中でも南半部に限られる可能性がある。また、城の築城時期についても、これまでの発掘結果などからわかるように、16世紀初頭以上にはさかのばらないものと推測された。とすれば、土肥氏の弓庄居城も永正年間以降のこととなろう。なお、城内から検出された遺構・遺物の内、12～13世紀代のものは井見庄成立以前にあった日置庄に関連した施設と考えられている。おそらく、上市川沿いの堀江と同様、水運など交通の便がよいこの地に庄園の主要施設が置かれ、一種の地域的中心地としての役割を果たしたのであろう。その後、ほぼ同じ場所に戦国末期に至り土肥氏の城郭が築かれたとみられる。

主郭西側下の堀
(手前は堀を仕切る堤)



主郭北側の郭で検出された建物遺構



同郭北側の空堀断面



城のプランについては、古図が本丸北側の郭の北面で著しく屈折に富んだ墨線を描いているが、発掘調査ではそのように屈折した堀や墨線は検出されなかった。おそらく近世の城郭縄張図の影響を受けた描写が古図の一部に取り入れられたものとみられる。その観点からすれば、古図に描く（未発掘地区である）木丸の屈折を伴う直線的な墨線なども、そうした近世縄張図の影響を受けている可能性があり、古図に見るプランは必ずしも実態を反映しているものとは言えないようである。ただし、古図に見える石垣については、一部で墨塗などから石が検出されており、本丸跡でも大正の頃まで石垣が残っていたといわれることから、使用されたことは間違いないと思われる。なお、城の存立した16世紀代の出土遺物としては、土師質皿、珠洲、越前、瀬戸・美濃、中国製磁器（白磁、青磁、天目、染付）や木製品多数がある。

註

- (1) 『富山県歴史の道調査報告書一立山道一』
- (2) 寛元2年12月24日付け関東下知状（前田家所蔵文書）に「地頭代左兵衛尉国難法師^{志義}」が登場する。
- (3) 観応3年9月18日付け足利義詮御判御教書（井上文書）など。
- (4) 霜月11日付け常仙書状（施王院文書）など。
- (5) 永正17年12月22日付け長尾為景書状（上杉家文書）に「為初神保越前守慶宗、某外遊佐・椎名・土肥親類被官數千人討捕、一國属静謐候」とある。
- (6) 土肥二郎九郎母訴状（上杉家文書）
- (7) 天正6年5月16日付け菅屋長頼書状（土肥家記）
- (8) 天正10年6月27日付け須田満親書状（有沢文書）
- (9) 土肥家記。なお、弓庄城をめぐる攻防戦の模様については、以前、『富山史壇』86・87合併号（昭和60年）所収「越中における中世城郭の攻防一城郭をめぐる戦闘史一」の中で一部述べたことがあり、参照されたい。
- (10) 新田茂雄氏所蔵文書
- (11) 宝暦14年新川郡占城跡名所旧蹟等書上申帳（金沢市立図書館蔵）
- (12) 越中四郡古城跡略記（同前）
- (13) 越中古跡粗記（同前）
- (14) 越州新川郡郷庄古城（同前）
- (15) 越中古城記（同前）
- (16) 越中古城館趾記（富山県立図書館蔵）
- (17) 文政元年城跡館跡由来申伝之趣書上申帳（金沢市立図書館蔵）
- (18) 『三州志』
- (19) 以下の記述は、『富山県上市町弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』（1985）の記述に基づくところが大きい。

6 郷田砦

弓庄城の東方に横たわる丘陵の北端、升形山（標高106.6m、比高約30m）の山上に築かれた砦。南に続く丘陵とはやや切り離され、独立峰のような形を呈する。ここは大岩川沿いに大岩方面へ通じる道筋の入口にあたり、西方に弓庄城、北東には大岩川をはさみ柿沢城と対する。特に弓庄城とは至近距離で約0.5kmを隔てるにすぎず、砦上から城内全体を見渡せたとみられる。山容はなだらかであり、高さも低いことから、さほど要害であったとは考えられず、むしろ弓庄城と柿沢・若荷谷山両城の中間に位置することが意味を持ったと考えられる。

まず、遺構を見てみよう（以下、図6参照）。最高所である山頂部には $12 \times 22\text{m}$ の広さの小規模な削平地（A郭、砦の主郭にあたる）があり、この東側から南側にかけての二面に土塁がめぐる。土塁の高さは内部から1~1.4mを測り、上幅は東側中央の広い所で2.5mである。虎口は南北2ヶ所に存在し、北側は土塁のない北西部から下る坂道だが、南側は土塁の中央に上幅2.5mの間口部を設け、ここから土橋を渡って対岸に出る。土橋の上幅は0.5mで、一人が渡るだけで精一杯である。また、南の対岸から渡って虎口に入るまで、道はゆるくカーブする形で設けられ、一気に直進して入れない。主郭南側の土塁上からは堀切の対岸がかなり低く見下ろせ、進入路のゆるいカーブとあわせ、特に手堅い守りとなっている。堀切は上幅が10mであり、南方の尾根続きを完全に断ち切っている。

これに対し、北側には土塁が部分的にしかめぐらず、堀切も見られないのは、こちらが山続きではないためであろうか。主郭の東側から北側、さらに西側にかけては人工的に切り立てた急斜面で守られ、一段下に腰郭（B郭）がめぐる。B郭の西側は約15mと幅が広いが、低い段によつて3段に分かれている。B郭のさらに一段下に、北側から西側にかけてもう一つの削平面（C郭）がめぐる。幅は広い所で7mを測り、上のB郭との間はやはり切り立った急斜面である。なお、山の北側と西側にはまだ多数の段が見られるが、後世に墓地や植林などのために作られたものであろう。前述のB・C郭の段にも改変された跡が多く、現状をそのまま遺構とみることはできない。

次に、当砦について記した書上類の史料を見ていきたい。



郷田砦跡遠望（右手の小山。左手に若荷谷山城跡が望める。）



砦跡付近より弓庄城跡一帯を見下ろす

A 一、江田村古城 上杉謙信公弓庄館城攻之時向城ニ被拵候由、天正年中青山佐渡守婦負郡堀尾之城合御引越一冬居住之由⁽¹⁾

B 一、柿沢村領古城者、江田升形与唱來申候而、弓庄館村城之出城之由申候候、御城主相知不申候、但 先達面調上候御絵図面ニ江田村ニ書上申候儀書損ニ面、柿沢村領ニ御座候⁽²⁾



図6 桑田岩遺構概念図(A～C…郭)

C 一、江田村の升形山城跡の事 此館跡といふ、謙信と合戦の時、土肥美作守築城也、天正十三年の以後新川郡利家の領地と成て、家臣青山佐渡守・⁽³⁾尾の城を爰に移り、爰を魚津へ引越といふ也。⁽³⁾

D 一、郷田升形古城 柿沢村領ニ面郷田升形山を唱申候、東西式拾五間程、南北拾六間程、南ハ山続きニ面小高キ山ニ御座候、當時ハ田畠相成居申候、土肥美作守殿出城跡を申伝候得共鑑成儀相知不申候。⁽⁴⁾

E 江田 〔※割注〕又作郷田。在弓庄郷田村領。古本作之江田升形山館迹。今猶旧塁土居残る。前後断壁。柿沢村より二町許也。柿沢の方に有首坂。〔※本文〕邑伝に、土肥美作守の持城にて、家老桂田善左衛門之を守ると云ふ。〔※割注〕一説、土肥孫十郎居すと云ふ。〔※本文〕土肥家記を按するに、天正十一年成政弓庄攻城時の陣城跡也。〔※割注〕土肥記開卷に、柿沢村邊に成政付城と図を顯す者即ち是也。〔※本文〕我が封土と成りては、青山佐渡守負郡の城生城より來りて一冬居たりと云ふ。⁽⁵⁾

まず、築城者（城主）について見ていくと、Eの『三州志』だけが土肥美作守の持城で、家老桂田善左衛門が守ったと記している。しかし、この記述は当砦の東方にある柿沢城について「越中古城記」が記している内容と同じであることから、本来は柿沢城に関する記述にあたるとみられる。このことはEが当砦の立地場所を「前後断壁」としていることからも理解できる。すなわち、山容がなだらかで、比高も小さい升形山には前後に断崖の地形はなく、むしろ柿沢城山の方がその表現にふさわしいこと、何よりも「越中古城記」が柿沢城について「前後深谷」と記していることがその点を裏付ける。

また、Cが上杉謙信と合戦の際、土肥美作守が築いたとし、Aが謙信による弓庄城攻めの際「向城」として築いたと伝えるなど、土肥氏と上杉謙信の戦いの折、築かれたと伝えるものがある。しかし、この謙信との戦いについては根拠が不明であり、にわかには信じ難い。さらにDが当砦を土肥美作守の出城かと伝えているが、本拠である弓庄城の出城であれば、もっと高く険しい山が城地として選ばれるべきであり、この伝承も信じ難い。やはり、Eの『三州志』が「土肥家記」を根拠に述べているように、天正11年（1583）の佐々成政による弓庄城攻めの際の向城（付城）とみるのが正しいのであろう。この攻城戦に際し、郷田砦とは別に西方の白岩川左岸段丘上にも日中砦が築かれ、東西から佐々方が向城を築いて弓庄城を包囲したことが知られる。なお、「土肥家記」所収の弓庄城古図には柿沢村の上に山頂を削り、まわりに切岸と平坦面をめぐらした砦跡が描かれ、「佐々成政付城ノ跡」と記入している。これが当砦にあたることは言うまでもない。

さて、成政が向城として当砦を築いたのは天正11年の4月頃とみられる。次の史料がそれを物語る（傍点、筆者）。

F 御切書披見、度々飛脚御越之由候へ共、是にて兩度ならては參著無之候、自此方も、一切脚力被指越候へ共、路次不自由故不罷付候哉、扱又、魚津退城之以後、其地付城數ヶ所致之、御防戦無御手透由、校量申候、御出馬遙々内計策にも不取乗、各無ニ切抜_レ被思定、兩度迄誓詞指越候刻、有御抜見御感涙候、（中略）

卯月十三日

狩野秀治（花押）

有沢図書助殿

直江兼続（花押）

雍五郎三郎殿

山県将監殿

參⁽⁶⁾

狩野・直江氏は上杉景勝の家臣であり、宛先の有沢図書助らは弓庄城を守る土肥美作守政繁の家臣である。これによれば、4月13日より少し前、佐々成政方が弓庄城の周辺に「付城」（向城）を数カ所⁽⁷⁾築いていることが知られる。その後、景勝方からの援軍を待ちながら土肥方は弓庄籠城を続けるが、ついに援軍は得られず、土肥方は城を明け渡して越後へ退去するのである。聞城は同年7～8月頃と推測されることから、郷田砦の使用もその時点で終止符が打たれたであろう。以後、砦が使用された形跡はない。とすれば、砦の使用も4～5ヵ月間程度であったとみられ、この時期における佐々成政の向城の遺構を示すものとして貴重であろう。全体の遺構から見て、防御が比較的堅い主郭に主將が陣し、他の将兵は中腹の腰郭などに駐屯したのである。南方から東方にかけて防備が特に固いのは、土肥方の詰城がある人岩方面などに備えたためともみられる。とすれば、砦の構築時点では佐々方は奥の山城を押さえておらず、山中からの反撃が予想されていたのかもしれない。

ところで、Aなどの史料によると、新川郡が前田氏領となったあと、婦負郡の城尾城（現八尾町）より前田氏家臣の青山佐渡守がここへ移り、一冬を過ごしたあと魚津城へ移ったという。青山佐渡守吉次は前田氏の有力部将で1万7千石を知行し、慶長17年（1612）魚津城で没している⁽⁸⁾。そのようなクラスの有力部将が果たしてこのように小規模で、本来向城として築かれた、にわか仕立ての小砦跡に入り、一冬を過ごしたであろうか。当地で一時的にせよ、入城するならば、弓庄城跡あたりが選ばれるはずであるが、弓庄関係の書上類にその記載はない。筆者は以前よりこの点に疑問を抱いてきたが、最近になって、同じ升形山を城名とする現魚津市の升形山城のことではないかと考えるに至った。この城はもと椎名氏の居城とした松倉城の支城であり、その後も上杉氏や佐々氏の部将によって改修のうえ、長らく使われた。さらに、前田氏時代の慶長の初めにも使われたといわれることから⁽⁹⁾、規模・構造とともに青山氏クラスの部将の居城として十分ふさわしいものと言える。以上の点から、従来、青山佐渡守が一冬移り住んだとされてきた升形山城とは、当地の郷田升形山ではなく、現魚津市の升形山城とみなしてよいと考える。

註

- (1) 越中古城記（金沢市立図書館蔵）
- (2) 文化13年古城跡併館跡由來所伝之趣書上申帳（同前）
- (3) 越中古跡祖記（同前）
- (4) 文政元年城跡館跡由來申伝之趣書上申帳（同前）

- (5) 『三州志』
- (6) 寸金雜錄
- (7) 土肥氏旧臣の藤田丹波覺書（雞肋編）によれば、佐々方がこの時築いた付城は5ヶ所であるという。
- (8) 諸士系譜
- (9) 『三州志』

7 柿沢城

大岩川が平野部へさしかかる地点の右岸山上（最高所の標高169.5m、比高110m）に築かれた山城である。城跡のある山を地元では「ジョウヤマ（城山）」と呼んでいるが、この山上に城跡が存在することは從来ほとんど知られていなかった。たまたま、1982年3月、周辺の古墳調査を行っていた藤田富士夫氏の情報により筆者が踏査を行い、当山上一帯に中世山城の遺構を確認したものである⁽¹⁾。江戸時代の書上類に「柿沢城山」・「柿沢村古城」・「柿沢村城山の城跡」と記されることから、ここでは「柿沢城」と呼ぶことにしたい。

城の縄張は図7で見るよう、南東から北西に向けてゆるやかに下降した尾根上にAからGまで計七つの郭を連ねたものである。最も高い位置にあるA郭と最も低いG郭との標高差は40mで、各郭は階段状に連続する形で設けられている。城の中心となる郭（主郭）は、最高所にあるA郭とみてよい。ここは城内でただ一ヶ所、土塁をめぐらしている特別な郭であり、城域の南端もここで画される。内部の広さは、14×16m（東西×南北、以下同じ）で、土塁は西側と南側の二面に設けられている。これは郭のすぐそばを通る尾根道のルートに備えた構えである。土塁の高さは2面の接合部が最も高く、郭内から2.6mを測り、北東・北西へ伸びるにつれて低くなる。上



柿沢城跡遠望（西方より）

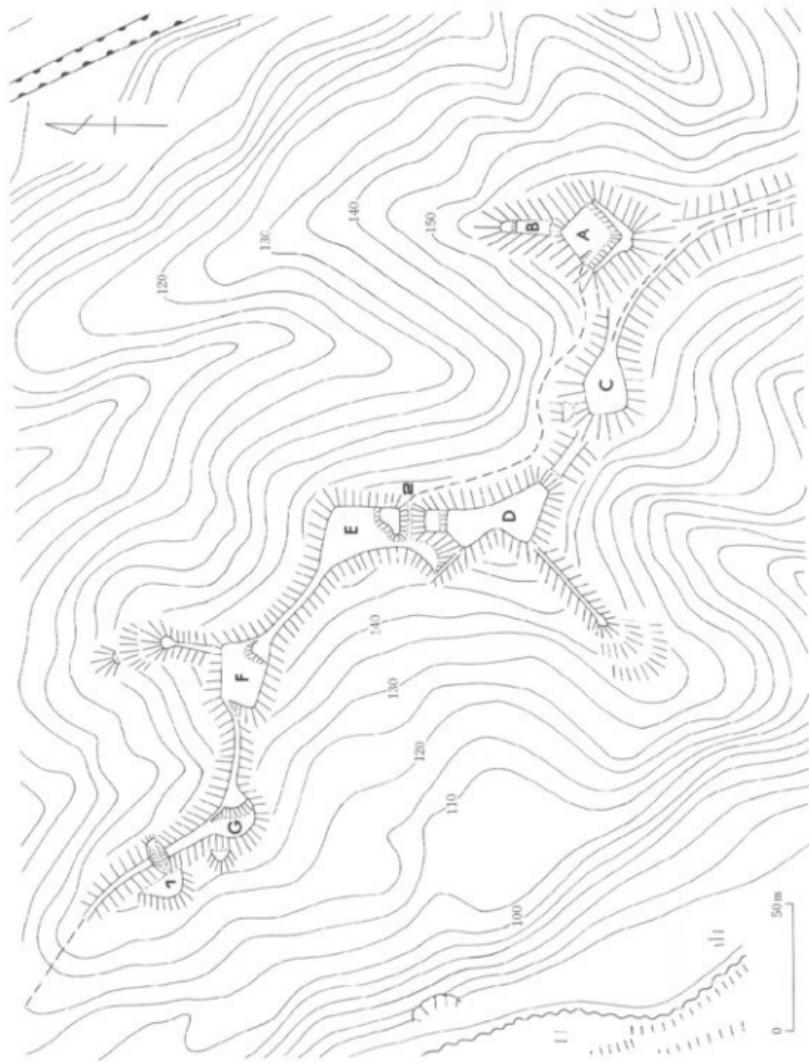
幅はやはり接合部付近が最も広く約3mで、両端へ行くにつれて狭くなる。郭の西端の土塁の裾には下へおりる出入口が見られ、道はそこから山腹をたどってD・E両郭を隔てる堀切（No.2）に出る。ただし、この道は後世に作られた可能性がある。ところで、A郭は主尾根から北に張り出した支尾根上を削平して設けられている。このため、位置的には主尾根の東側の谷に臨んだ形となる。ここからは北方に上市の町並みや新川の平野部、さらに日本海までも望むことができる。また、東南方向には茗荷谷山城跡も望める。

次に、A郭から北方へ張り出した尾根を削平してB郭（4×18m）が設けられている。北端は一段低くなり、急斜面となって主尾根東側の谷に落ちている。位置的に見て、A郭の北側を防御する補助郭であろう。一方、A郭から西へ下った尾根上にC郭の削平面（23×18m）がある。この西端北側斜面は人工的に切り立てた急斜面で、一段下に腰郭状の小削平地（6×4m）を設ける。C郭から幅6mの尾根を下ると、D郭の手前で尾根の上部が削り取られ、D郭との間に段差を設けている。防御上の配慮であろう。D郭（18×41m）はC郭同様きれいな削平面で、北側に一段低く9×6mの小削平地が設けられている。その先には城内で最大の堀切（No.2、上幅11m、深さ4.4m）が段差を伴って設けられている。この堀切はD郭以南と北方の尾根続きを遮断しており、A-Dの主要郭群を北方の尾根伝いからの攻撃から守る役割を果たしている。また、堀切から西側にまわり込む敵に対しても、斜面が切り立ててあり、固い守りを形成している。一方、D郭の西南部から西南方向に水平な細尾根が張り出しているが、その先端部には4×3mの小削平地を設けている。

堀切（No.2）の北に続くE郭は20×33mの広さがあり、南端の堀切（No.2）に面し、高まりがある。同郭から幅3mの尾根を北西へたどると、F郭の削平面（21×13m）がある。これもきれいな削平面であり、北北東に張り出した支尾根の先端部に4×4.5mの小削平地を設けている。このように郭から張り出した支尾根の先端部に小さな削平地を設けるのは、側面の谷から登って取り付く敵を防ぐためのものであろう。F郭の西側は人工的に切り立てた斜面であり、尾根はここから急に下った細尾根となり、G郭に至る。G郭は尾根道の西側に5.5×18m程度の広さの削平面を設けたものである。この郭の北西には上幅6.5m、深さ2m（南側）の堀切（No.1）が尾根道を断ち切っている。堀切の西側には削平地も付随する。この堀切は城域の北端を画するものであり、北方に対しては多少の高低差を設けているが、奥にあるNo.2の堀切と比べると、規模は小さく貧弱な感を与える。前述のG郭はおそらくこの堀切（No.1）を守るために施設が置かれた所であろう。

以上、各郭の概要を述べてきたが、郭の配置などから、防御が主として北方の平野側に向かれていることが知られる。一方、主郭にあるA郭以南には堀切が設けられておらず、やや防御上不安を覚えるが、これは尾根伝いに南東の茗荷谷山城と連絡が可能であり、両者が緊密な関係にあったこと、このため南方からの攻撃に備える必要性が少なかったからであろうか。各郭の削平はていねいに行われており、郭数もそれなりに多いのはある程度居住性を考慮したものと言えるが、防御施設の中心となるべき堀切が少なく、代りに階段状の段差を多用しているのが特徴である。戦国末

図 7 桃沢城遺構概念図 (A-G…郭、I-2…堀切)



期の山城としては、いささか防御が貧弱であり、戦国中期ごろの築城とも考えられる。

次に、柿沢城について記した文献史料（江戸期の書上類）を見てみよう。

- A 一、柿沢城山 柿沢村領之内ニ而字城山。唱申候得共、境及無御座、由来及相知不申候。⁽²⁾
- B 一、柿沢村古城 前後深谷、浅生深山之方尾続ニ古道有之候、肥美作守家老桂田善左衛門申者居住之由。⁽³⁾
- C 一、柿沢村城山の城跡の事 此城跡ハ土肥美作守籠りたる所にして、前後谷深して浅生村次山の尾崎続古道有、要害の城也。⁽⁴⁾

これら3点の史料を整理すると、(1)文政元年（1818）当時、城跡のある山が字「城山」と呼ばれていたこと、(2)城跡の前後は深谷で、(3)浅生村方面へは尾根続きに古道があったこと、(4)城主は土肥美作守または美作守の家老桂田善左衛門と伝えられていたことなどが明らかとなる。この内、(2)と(3)の地形・交通に関する記述は現状に一致し、(1)の呼称についても地元で「ジョウヤマ（城山）」と呼んでいる点と一致することから、記載内容の信頼性は高い。城主については、書上類に記されているように土肥氏と考えてよいであろう。特に土肥美作守は弓庄城主として知られた武将であることから、その弓庄上肥氏の支城の一つであったと考えられる。背後にそびえる茗荷谷山城が美作守の「奥城」（詰城）と伝えられていること⁽⁵⁾からすれば、柿沢城は弓庄の本城と茗荷谷山の詰城を結ぶ連絡路の中継拠点＝「つなぎの城」であったとみられる。参考までに柿沢城から弓庄城までは直線距離で約1km、同じく茗荷谷山城までは約2.5kmを隔てる。周辺地域における戦国期の政治・経済動向から考えると、具体的な築城時期としては、上肥氏が魔王院領井見庄の代官として史上に登場する永正年間（16世紀初め）以降とみられよう。

註

- (1) 高岡 滅「富山県上市町柿沢城と上人土肥氏の城館配置」（『かんとりい』第6号、越中の歴史と文化を考える会、1982年）参照。
- (2) 文政元年城跡館跡由來申伝之趣書上申帳（金沢市立図書館蔵）
- (3) 越中古城記（同前）
- (4) 越中古跡粗記（同前）
- (5) 『三州志』の「茗荷谷山」の項に、「邑伝に、土肥美作守の奥城と云ふ」とある。

8 茗荷谷山城

大岩の東方にそびえる城ヶ平山（標高446.3m、比高310m）の山上に築かれた山城。この山の東西両面は深い谷で守られた要害で、南西から北へと続く主尾根に沿って郭が設けられている。土肥氏支城群の中では千石山城に次いで標高が高い山上に存在し、平野側から見てもその高くそびえる山容が特徴的である。山上からは新川の平野部や日本海を望み、遠く魚津市の松倉城、また近くに柿沢城や郷田砦などを見渡せる。

城の遺構は全体としては良好に残る（以下、図8参照）。主郭は最高所のD郭とみられる。

ここは山頂部を南北に細長く削平した郭で、北端に三角点がある。規模は $7 \times 50\text{m}$ で、この南北に主郭を直接守る形で、一段低くE(南側)・C(北側)の郭が設けられている。この内、E郭は $12 \times 9\text{ m}$ の広さで南側は急峻な斜面である。また、C郭は $9 \times 11\text{ m}$ で、北側はNo.8の堀切(上幅8m、深さ2m)で守られている。E郭の南方を見ていくと、まず急な斜面を下り、2段の削平面がある。上の段は $11 \times 6\text{ m}$ 、下の段は $9 \times 4\text{ m}$ の広さがある。この下にあるF郭は $9 \times 12\text{ m}$ の削平面で、ここからだらだらとした斜面を下ると、尾根の西側を掘り込む形で $7 \times 18\text{ m}$ の削平面(G郭)がある。G郭の南側にはNo.9の堀切(上幅6m、深さ3m)が設けられ、対岸の南側はG郭側から見下ろせるように削って低くしてある。おそらく防衛上の配慮であろう。堀切の南にあるH郭は3段の削平面から成る。この内、南側の最上部は、 $10 \times 16\text{ m}$ の広さがあり、南西部に一段低く掘り込んだ箇所が見られる。H郭からだらだらとした斜面を下ると、 $12 \times 42\text{ m}$ の細長いI郭がある。ここからまたゆるい斜面を下ると、高さ7.5mに達する大きな切岸によって尾根筋が断たれている。これは主郭南側での最大の守りである。切岸からやせ尾根を40m西にたどった所に $6 \times 9\text{ m}$ の広さの削平面(J郭)があり、さらにやせ尾根を35m西へだら下った所にNo.10の堀切(上幅8m、深さ4m)を設けている。ここは城内最南端の堀切にあたり、城域もここで画される。

一方、主郭の北方、堀切No.8以北を見ていくと、まず水平な細尾根が27m続き、その先は大規模な切岸によって北方の尾根筋が断たれている。この北側には尾根筋を掘り込む形で $5 \times 7\text{ m}$ の小平坦面(B郭)が設けられている。郭の西側は掘り残されて土壘の役割を果たしている。さらに尾根を下ると、No.5(上幅7m、深さ4m)とNo.4(上幅9.5m、深さ6m)の堀切がそれぞれ段差を付けて設けられている。この内、No.4堀切の北側は大きく切り立てられ、主郭北側では最大の守りとなっている。ここからさらに北へ尾根を下ると、尾根の東側を掘る形でNo.3の堀切(上幅6m)が設けられ、南側に $5.5 \times 4\text{ m}$ の小削平地が付随する。このあと北西方向へ尾根を下ると、先端部に $6 \times 4\text{ m}$ の小削平面がある。尾根はここで西と北の二方向に分かれており、この削平面はそれら二方向からの登り道を見下ろす形になる。小規模ではあるが、要所を押さえた防御拠点と言える。ここから西へ下った尾根の途中には、やや小さい独立峰状の削平面(A郭、



茗荷谷山城跡遠望（西方より）



山頂より新川平野を見下ろす



南端の堀切 (No.10)



主郭北側の大切岸

数は主郭を含め計10ヶ所となるが、無論、この他にも小さな削平面が多数設けられている。これだけの郭や防御施設を備えた山城は中新川地域で他に例がなく、随一の規模を誇る。特に北の堀切No.1から南の堀切No.10までの長さは約1.2kmにも及んでいるが、このように長大な尾根筋を城域として取り込んだ城は本県においても珍しく、この城の大きな特徴となっている。しかし、逆にこれだけ広範囲に郭などが分散しておれば、守備する側の連携も取りにくく、城を守ること自体が困難だったとみられる。また、郭数は多いものの、大半が小さな平坦面であり、それほど多数の人員を収容できたとは思えない。さらに、険しい高所の山上にあることから、日常の居住には適せず、地域支配の拠点とはなり得なかつたと考えられる。やはり、戦時の籠城を主目的とした詰城だったのであろう。

なお、城の縄張りは東麓の大岩側を主に意識したものとなっており、大手方向もその方向だったようであるが、実際の登り道としては北方の須山側からのルートが登りやすく、この方向にも搦手道などが存在したとみられる。

統いて、当城に関する書上類を見てみよう。

A 一、名荷谷山城跡の事 此城跡ハ土肥美作守籠りたる所也⁽¹⁾

B 一、名荷谷村領古城者、先年土肥左衛門様御居城之由申伝候⁽²⁾

C 一、弓ノ庄柿沢村ニハ土肥美作守在城セリ、(中略) 亦茗荷谷村大岩不動堂ノ北ノ高山ニ城ヲ

7×3 m) がある。この北側のへりには削り残しの土壘も見られる。A郭は北西方向から登る尾根道を見下ろせるため、やはり防御拠点として有効な位置にある。さらに下ると、尾根筋が狭くなった所に西側を掘り残す形で上幅4 mの小さな堀切No.1がある。ここが城の北端の堀切であり、城もこれによって画される。また、堀切No.1と谷をはさんだ東側の尾根には上幅3 m、深さ0.9 mの小規模な堀切No.2がある。

さて、前述の主郭北側の大切岸付近から北東に向けては支尾根が張り出し、山続きとなっているが、この尾根筋にはNo.6 (上幅7 m、深さ3 m) とNo.7 (上幅9 m、深さ3 m) の2本の堀切が設けてあり、この方向からの攻撃に備えた守りとなっている。

以上、主郭の南側には郭6ヶ所、堀切2ヶ所、大切岸1ヶ所、また北側には郭3ヶ所、堀切8ヶ所、大切岸1ヶ所が数えられる。郭

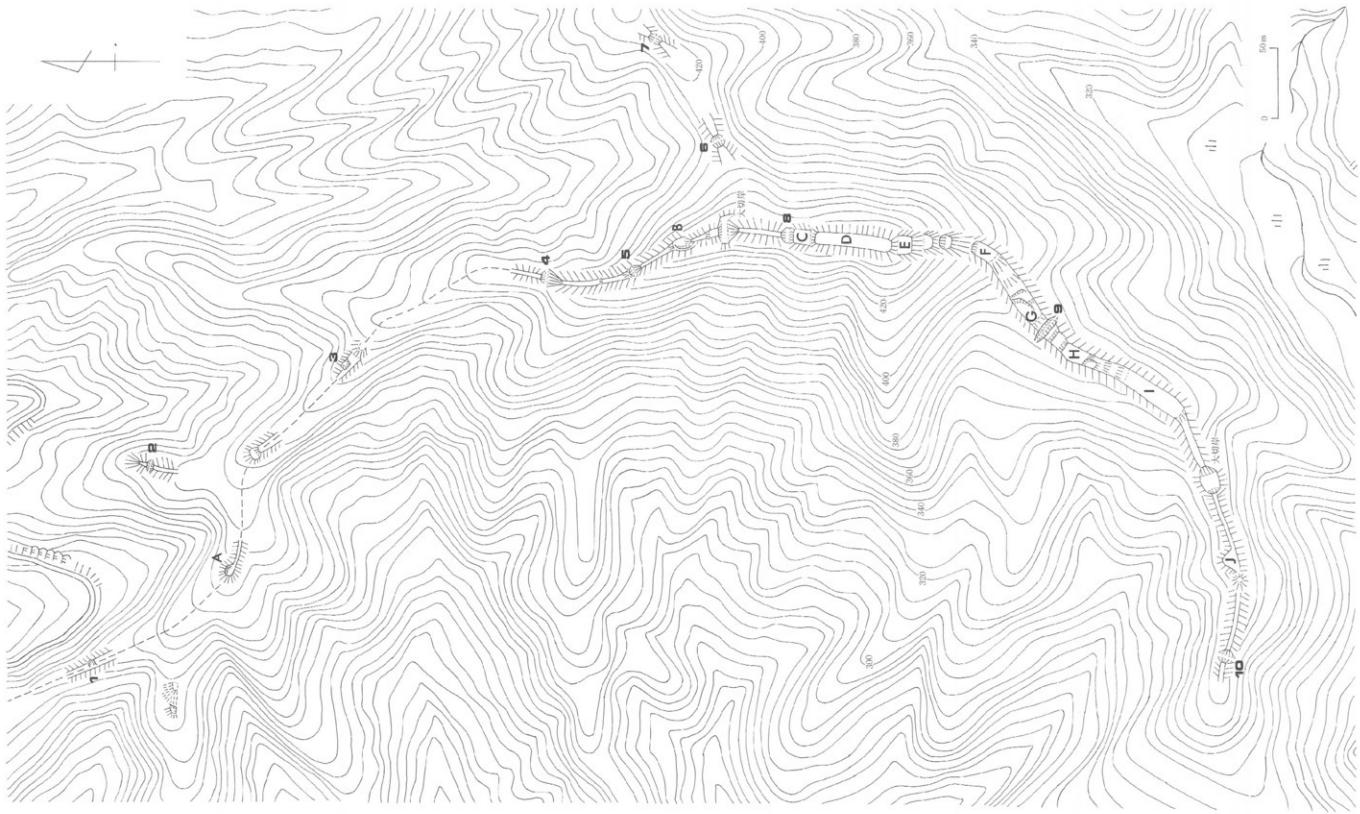


图 8 茅膏谷山城遺跡發掘圖

築キ柿沢トカケ持也（後略）⁽³⁾

- D 一、名荷谷古城　名荷谷村領東西三拾間程、南北五間程、高キ山ニ而東西共切岸ニ而難登、南北ふ通路有之候得共甚峻阻ニ而御座候、御城主御名前等相知不申候⁽⁴⁾
- E 一、名荷谷山古城　里人諱ニ長寛年中鎮西此所ニ來リ大岩山之別当ヲ被頼山中ニ居住之由、則塙谷村為朝之墓有⁽⁵⁾
- F 一、名荷谷村領之内専立寺ニ申屋敷跡有之、今は島ニ相成候由、但義⁽⁶⁾仕候處専立寺屋敷ニ申所無御座候、古城御座候則因面ニ相記申候⁽⁶⁾
- G 茗荷谷山　〔※本文〕邑伝に、土肥美作守の奥城と云ふ。〔※割注は上記の書上類と内容重複のため省略〕⁽⁷⁾

これらの史料を整理すると、城主については土肥氏の名があげられており、土肥美作守（A・C・G）または土肥左衛門（B）と伝えられている。特にCで弓庄城主土肥美作守が「大岩不動堂ノ北ノ高山」（城ヶ平山=茗荷谷山城を指す）に城を築き、弓庄城と掛持ちしていたと記す点、またGが当城を土肥美作守の「奥城」（詰城）と伝えている点は注目される。このことは当城が弓庄城の詰城であったことを物語るものと言えよう。弓庄本城とこの茗荷谷山城の間には別に「つなぎの城」である柿沢城が存在しており、3城は弓庄城→柿沢城→茗荷谷山城というラインで結ばれていたことになる。なお、別の伝承として、史料Eが長寛年間（1163～65）鎮西八郎為朝がこの地に来て、当山中に居住したとの伝えを記すが、その伝承の根拠は不明である。また、史料Fによると、当地に専立寺という寺の屋敷跡があると記すが、調べたところ、そのような屋敷跡はなく、古城跡があると述べている。

城の遺構については、史料Dが詳しく記しているが、(1)高い山で、東西が切岸で登りにくいくこと、また(2)南北から登る道があるが、大変険しいこと—と述べているのは山容と立地を正確に描写したものである。また、規模を東西30間程、南北5間程としたのは山頂部の主郭部分を指すとみられるが、現状は南北に長いため、方位については東西・南北を取り違えたものであろう。

全体の遺構を見る限り、かなりの労力と期間をかけて構築された山城であり、切岸や堀切の規模から最終的な完成は戦国後期と考えられるが、繩張自体は古いスタイルである。土肥氏支城群の中では最大級の詰城と言えるが、天正10（1582）～11年の弓庄城攻防戦に際し、土肥方が当城にたて籠ったかどうかは不明である。

註

- (1) 越中古跡粗記（金沢市立図書館蔵）
- (2) 文化13年古城跡併館跡由来所伝之趣書上申帳（同前）
- (3) 越州新川郡郷庄古城（同前）
- (4) 文政元年城跡館跡由来申伝之趣書上申帳（同前）
- (5) 越中古城記（同前）
- (6) 文化7年新川郡古城跡併館跡御付札之ケ所詮議之趣脇書仕上ヶ申帳（同前）
- (7) 『三州志』

参考 9 小森館

滑川市小森に所在。集落の東側山上（標高170m、比高145m）にあって、前面を郷川が流れ、その川沿いの谷を見下ろす形で立地する。この郷川は中世においては堀江（土肥氏の居城所在地）の南方を西流し、小出付近で北へ転じたあと、白岩川に流入していたとみられる⁽¹⁾。おそらく堀江庄内の水運にも十分利用されていた河川であり、その川の上流部に小森が位置することになる。小森付近には、当初国衙領で、のちに室町幕府の料所になったとみられる小森保が存在した。次の史料は、永禄6年（1563）12月、將軍義輝がその小森保公用の確保を促した書状である。

- A 典葉頭知行越州小森保公用事、去年より無京着之由候、急度可申下旨、為訛慮被仰下候、此等之趣、内々先被仰遣、時儀急候者、面而可申遣候、恐惶謹言、

十二月八日

〔足利〕義輝 御判

近衛藏⁽²⁾

さて、当館について、江戸時代の書上類は次のように記している。

- B 小森館 藤沢

唯今ハ跡モ作所成、在所之上ニ土手少有、御鷹師仕藤沢五兵衛とて御切米被下罷有、親相果牢人仕干今奉公仕罷有候、謙信之時相背追落シ候由⁽³⁾

- C 小森 〔※割注〕在加積郡。館迹なりと旧記にあり。然れども今正之。当時無遺跡。邑伝も亦無之と云ふ。

〔※本文〕藤田五兵衛居せり。無伝。⁽⁴⁾

これらによれば、鷹師の藤沢（藤田）五兵衛なる者の居住した跡と伝えられるが、Cの『三州志』は、遺跡も伝承もない否定的な記事となっている。しかし、一部の書上類にはこの鷹師居住の跡を護摩堂城のこととして誤って記載しているものが見られる。たとえば、次の「越中古城軍記」（富山県立図書館蔵）などがそうである。

- D 護摩堂山古城 住主不知、西に土塁少有、御家藤沢五兵衛ト申ス鷹師居住シ死去シテ子ハ浪入ス



小森館跡遠望（中央山上。西方より）



東側から見た堀切

しかし、この鷹帥藤沢五兵衛の居住は加賀藩（前田氏）時代のごく一時的なものだったと考えられる。むしろ、江戸時代以前には、当地に小森氏なる土豪が存在し、その居館の跡である可能性が高いとみられる。すなわち『越中志微』は小森村に所在する小森内匠の墓所に関連し、「小森氏系図帳」をのせている。それによると、「元祖小森内匠高家、高徳公天正十二年被召出御切米百七十俵被下。從瑞龍公阿度ニ百俵御加増押領、都合三百七十俵被下置。病死年月等不相知。内匠子小森与助吉次、父不被召出以前、童形而高徳公被召出、三百三拾石被下置。越中魚津城御攻落之刻、一番乗仕、御加増五十石、都合三百八拾石被下置。能州末森城佐々成政取巻刻、籠城仕。文禄元年二月十九日於魚津城死去。内匠弟小森六郎左衛門、式百石押領。慶長十三年正月病死とあり。二家相続子孫子今在之。」と記し、

小森内匠高家の墓



初代内匠高家が天正12年（1584）前田利家に仕えたこと、また2代与助吉次は同10年頃より利家に仕え、魚津城攻めや末森城の籠城戦に従事したことを述べている。これに対し、同じ『越中志微』所収の「寛文11年小松脚馬廻小森四郎兵衛由縕帳」では、曾祖父小森内匠が利家時代、末森城にあって、成政による攻撃の際籠城し、寛永12年（1635）に病死したと記す。いずれにせよ、この地を本拠とした土豪ではあったかも知れないが、天正10年にはすでに前田氏に仕え、その後、各地を転戦していたようである。前記の系図帳などには内匠以前の系譜を記さないが、先にも述べたように当地には室町幕府の料所が存在したことから、小森氏がこの地でその管理などに関わっていたことが推測される。憶測かもしれないが、そのことはまた、小森氏が室町幕府の奉公衆に連なる由緒を有していたことをうかがわせる。なお、現在、集落の北端に弘化2年（1845）に建てられた「元祖 小森内匠高家墓」があり、注目される。おそらく小森氏の子孫によって作られたものであろう。

統いて、館の遺構を図9から見てみよう。全体の縹張はシンプルで、谷に向けて張り出した尾根筋の先端部を利用する。そして、山続きの東側に堀切を設け、尾根伝いを遮断している。ここで城域の東側が画される。内部は西方に向けてゆるやかに下った平坦面で、山続きを除く三方は極めて急峻な斜面である。自然の要害な地形が十分に活かされているため、郭のへりに土塁などの防衛施設を必要としないのである。郭内部の広さは55.5×40m程度と比較的広い平坦面である。また、堀切の方は上幅が15.5mで、内部は2段になっている。深さは最も深い西側で2.8mを測る。堀切は北半部が二重になり、堀切から東はだらだらと登る平坦な広い尾根となる。

史料Bが「館」と記しているように、全体として広く平坦な居住空間を有するのが特徴であり、要害というよりも日常的な居住を主体とした施設とみられる。

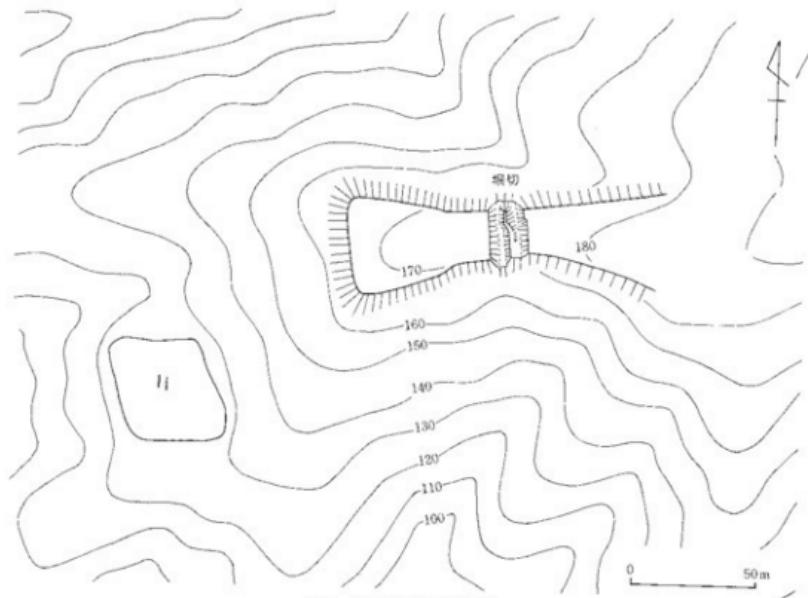


図9 小森館遺構概念図

註

- (1) 石原与作「立山町付近に存在した庄園の名について一特に堀江庄を例として」(『富山史壇』第56・57合併号)
- (2) 加能越古文叢 三十四
- (3) 越中古城館跡記 (富山県立図書館蔵)
- (4) 『三州志』

参考 10 日 中 碓

立山町中に所在。現在、同町指定史跡。白岩川左岸の段丘上 (標高58m、東麓からの比高15m) に築かれ、東側が白岩川に面した崖となった要害である。砦跡からは白岩川をはさみ東方約500m の台地上に土肥氏の本拠とした弓庄城跡を望める。まず、この砦について記した書上類を見ていきたい。

A 一、日中村領館跡者、先年謙信様御取建之由申伝候、年号之儀相知不申候。(1)

- B 一、日中村領之内ニ城跡御座候、佐々内藏助、土肥美作を攻申候時分付城之由申伝候、只今ハ島ニ仕置申候⁽²⁾
- C 一、日中 屋敷構、白岩川岸ノ上ニ面御座候、岸高ク御座候へく候、南ノ方野つゝきニ面御座候、居住人名知レ不申候⁽³⁾
- D …、日中館跡 日中村領、南北式拾間程、東西式拾間程、南北西三方ニ堀跡御座候、東ハ白岩川申川ニ御座候、先年長尾謙信殿御取建之旨ニ而弓庄館村之域落去之上ニ面焼払申由承伝申候、年号相知不申候⁽⁴⁾
- E 日中 [※割注] 在弓庄日中村領山上。東南ニ辺白岩川流れ、巖高く切れたる所也。然れども南西は高原野・上段野にて平夷也。南東山近し。堡迹今為烟。[※本文] 元禄五年・宝永二年邑長より書き上ぐる記に、成政砦跡とあり。按するに、是天正十一年四月弓庄城を成政攻むる時築く四砦の一なるべし。⁽⁵⁾
- これらによると、当地の遺構を城跡、館跡、砦跡などと様々に記すが、後述するように佐々成政が弓庄城を攻めた際の向城とみられること、また規模やプランが小規模・単純なことから、ここでは「日中砦」と呼ぶことにしたい。築城者については、史料A・Dが上杉謙信の名をあげているが、この点は郷田砦と同様、明確な根拠がなく信じ難い。それよりもB・Eに記すように、佐々成政が弓庄城を攻めた時に築いた砦（向城、付城）と見るのが正しいのであろう。それでは、成政がこの砦を築いたのは、いつのことなのか。弓庄城主の土肥政繁が上杉氏に復属し、成政に敵対するようになったのは、天正10年（1582）6月の本能寺の変直後のことである。この知らせによって、攻略したばかりの魚津城から成政らの織田勢が撤収し、上杉方はまもなく魚津・小出城を再び撲滅する。これに土肥氏も呼応した形になったため、成政は態勢を立て直し、これら上杉方への反撃に移った。この第1回の弓庄攻めは、土肥氏旧臣藤田丹波の覺書⁽⁶⁾によれば、同年8月20日のことであった。それによると、「一、八月廿日ニゆミの庄の城へ佐々蔵介越前加賀能登越中四ヶ国の人數を以よせ申され候日知寺と申代より城まで四度返し鍵合申候」とあり、成政が日知寺（日中）に向城を置き、その向城と弓庄城との間で何回も両軍が戦闘を行ったと伝えている。この時の攻防戦で土肥方が成政勢を撃退したことは、次の史料によって明らかである。
- F 自魚津如注進者、敵其地讐取詰防戦手堅故、退散之由心地好候、定吾分等可為稼トシ校量候、次ニ美作守証人行其罪候之由痛入候、然共当方無二之所、能々団徒見届候哉、忠信不浅候、將亦敵小出之地取詰候由、定差越者有問敷候、弥須田令入魂、堅固之備仕置候也

九月四日

^(トシ)景勝（花押）

有沢図書助との⁽⁷⁾

これは上杉景勝が魚津城からの注進を得て、弓庄城の土肥氏臣有沢図書助宛に送った書状である。それによると、佐々勢は9月4日以前に弓庄周辺より撤退し、今度は小出城を攻めているとある。前述の藤田丹波覚書を考慮するなら、佐々勢の在陣は8月20日より9月初めまでのごく短い期間であったことが知られる。この間、成政は日中に本陣を据え、向城を構築したのである



西側の空堀断面（北より）



北側の空堀（右手、土塁）



南側の空堀（右手、土塁）

う。そして、土肥方の強力な防戦にあい、いつたんは攻略をあきらめ、軍勢を返したとみられる。

続いて、翌年成政は第2回の弓庄攻めを行う。それは、藤田丹波の覚書によれば、3月4日⁽⁸⁾のことであり、その後佐々勢は弓庄城の周囲に付城を5ヵ所築き、7月7日まで日夜攻防を繰り返したという。言うまでもなく、この時の向城の中には日中の砦も含まれていたはずであり、佐々勢は前年の砦を再度修築のうえ、使用したとみられる。こうして、佐々勢による包囲は続けられたが、土肥勢は固く城を守って攻撃に耐えた。しかし、賤ヶ岳の合戦の結果、越中一国は佐々成政に支配が任せられたことにより、土肥氏の抵抗も次第に意味のないものとなっていました。そして、7～8月頃、土肥氏は成政と和議を結び、城を明け渡して越後へ退去するのである。この時点で日中砦もその役割を終え、その後再び使われることはなかった。

以上、簡単に攻防戦の流れを見てきたが、整理すると、当砦が天正10年8月に向城（付城）として構築され、翌年の城攻めにも再使用されたことがわかる。そうした点からすれば、この日中砦跡は天正10～11年の佐々成政構築の向城（付城）跡として貴重な遺構であると言える。

では、次に砦の遺構を見てみよう（以下、図10参照）。プランは東側（弓庄城側）が崖

に面し、他の三方が土塁と空堀によって囲まれた方形単郭型式である。出入口（虎口）は西側の南寄りに設けられた土塁の間口部で、土橋によって外部と結ばれている。空堀の上幅は7～9m程度で、全体の規模は堀を含め、58×58m（土塁の内部は38×33m）程度である。史料Dに記された規模は、土塁内部の広さを示したものとみられ、数値はほぼ現状に一致する。ごく一時的な向城であることから、史料Cが「屋敷構」と記すのもうなづける。前記の書上類によれば、砦跡は江戸時代に畠になっていたことがわかるが、明治時代以降は墓地となっている。なお、北側の

空堀の内、西半部が道路の拡幅の際に削られたのが惜しまれる。

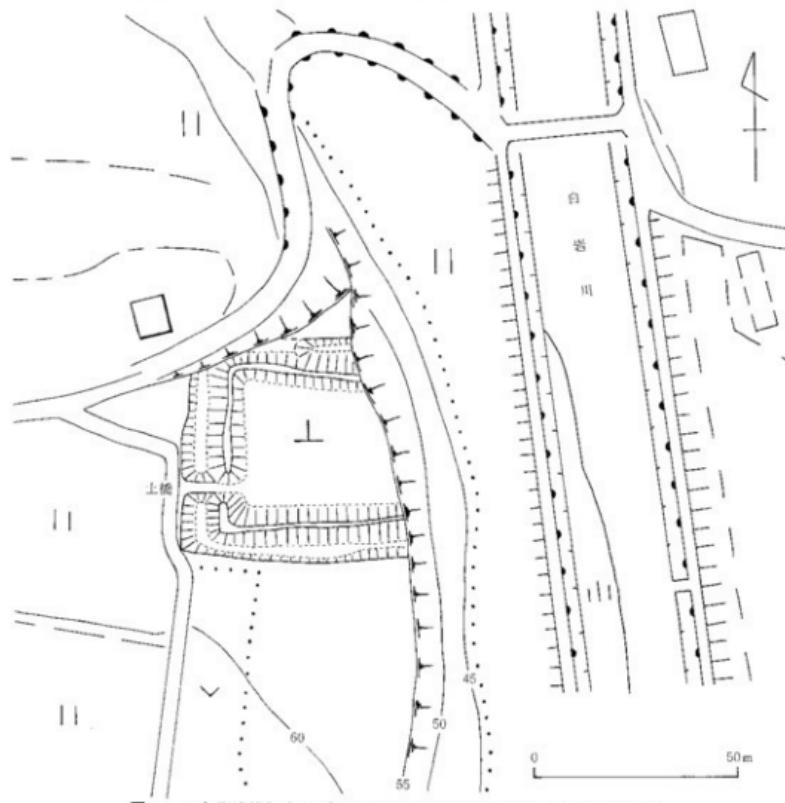


図10 日中寺跡遺構概念図 (1978年当時の実測図を基に作図。上部の上部は一部墓によって削られており、推定線で描いてある。)

註

- (1) 文化13年古城跡併館跡由来所伝之趣書上申帳 (金沢市立図書館蔵)
- (2) 宝曆14年新川郡古城跡名所旧蹟等書上申帳 (同前)
- (3) 越中四郡古城跡略記 (同前)
- (4) 文政元年城跡館跡由來申伝之趣書上申帳 (同前)
- (5) 『三州志』
- (6) 雜肋編

(7) 有沢文書

(8) 「土肥家記」には、4月5日より成政が攻め寄せ、付城を4カ所築いたとある。

参考 11 高原城

現立山町高原に所在。高原は柄津川の右岸に位置する集落で、弓庄城からは約2kmを隔てる。『五百石地方郷土史要』(昭和10年発行)によると、「源頼朝の功臣土肥次郎実平の後胤が弓庄を領有するに(惣領五万七千石)当り、居城を弓庄館に築き当部落の南方柄津川の右岸、今の大圓の台地に家老の守城を置きたりといふ。さて源訪の地は城主の武運長久を祈願する源訪大明神の社殿のありし処なりとも云へられる。当時柄津川右岸一帯の地は正親町天皇天正の初めまで凡二百余年間城下郷をなし寺社を初め商家亦軒を並べて賑ひたりといふ。今部落の南方野町部落にかけて、大圓、宮地、八幡、上光明寺、番上町、榎町等往時を偲ばしむる地名現存せり、弓莊高原守城は館本城(奥城は茗荷谷山)と興亡を俱にしたるものにて美作守の越後にきたる後は郷民離散して昔日の寒村に復れり。」とあり、当地の字「大圓」付近に弓庄城主土肥氏の家老(同書では別に土肥美作守政繁の一族とも記す)の居城があったと伝えている。

現地は昭和50年代に圃場整備が行われ、水田などの旧地割は失われているが、聞き取りによるところ、高原集落南側で柄津川沿いの字「念仮塚」付近が城跡であったとみられる。前記『郷土史要』に記す「大圓」はこの「念仮塚」の東側に隣接する小字である。「大圓」の字名は土壘などで囲んだ地形に由来するとみられ、中世城館跡に間違した地名でもある。(1)

地元の話によると、念仮塚はもと高台になっており、東側は雜木の茂る墓地、西側は畠になっていたという。そして、墓地のへりには東側から北側にかけてL字形に低い土壘のような痕跡(高さ0.5~0.6m程度)がめぐっていたが、戦時に崩され、畠になったという。古い地籍図を見ると、この念仮塚付近には郭跡らしい方形の地割とその外側をめぐる帶状の低い水田(堀跡か)を認めることができ、城郭遺構の存在をうかがわせる。



念仮塚を南方より見る

今のことろ、江戸時代の書上類などに当地の城跡に関する記載はないが、この地が中世において高野庄に属していたとみられ、東にある土肥氏の本拠地・井見庄(弓庄)に隣接していたことから、土肥氏の城館が置かれていた可能性は十分考えられる。史料上、土肥氏と高野庄の関係は、天正9年(1581)10月13日付けで佐々成政が土肥政繁家臣有沢図書助に高野の内で五百俵の知行を与えていたこと(2)、また翌10年6月27日付けで上杉部将須田満親が有沢図書助に高野の内「館分廿村」

を与えていたこと⁽³⁾、さらに同年8月3日付けで土肥政繁が有沢団書助に高野の内、「本郷」一円を与えていることなどが知られ、特に有沢氏との関わりが深いようである。とすれば、戦国末あるいはすでにそれ以前より、弓庄土肥氏の家臣であった有沢氏などがこの高原付近に所領を有して進出し、その支配拠点となる城館を構えていたとも推測できる。また、柄津川沿いの高原に城館を設けたのは、同川の水運を利用・統制する意図があったのかも知れない。当然、その城館は弓庄城の支城の役割を果たすことになったであろう。

註

- (1) たとえば、富山市中沖にあった野城の城跡付近にも「大圓」・「小圓」の地名が残る。
- (2) 有沢文書
- (3) 同前
- (4) 同前

上市町の城館について

1 分布・立地状況

富山県内には200ヶ所余りの中世城館が存在したが、上市町域にはその内8ヶ所が存在する。当町域の城館はほとんどが山地に立地し、平地にあるのは郷柿沢館と弓庄城だけである。城館の立地は、以前からたびたび述べているように交通路や生産地域と深い関わりがある。平成元年に調査を実施した大山町の場合には、大半が越中と飛騨を結ぶ道筋に沿って立地することが知られた⁽¹⁾。上市町の場合は、滑川から上市川や白岩川沿いに芦嶺寺に至る立山参詣道が主要な道筋として知られ⁽²⁾、その街道沿いに有金館・堀江城（以上、滑川市）・弓庄城（上市町）・日中砦・池田城・礼拝殿城・芦嶺寺城（以上、立山町）が立地する。このことはそのまま、同街道の歴史の古さを物語るとともに、これらの城館群が同街道を押さえる意図で築かれたことを理解できる。そして街道の終点である芦嶺寺は立山の麓にあって、立山信仰の拠点となる集落であり、古来、各地から参詣人が集まる地であった。特に芦嶺寺には立山信仰の衆徒組織が存在し、それは時として一種の軍事的勢力とみなされ、中世の武将達にとって見過ごすことのできぬ存在であった。射水・婦負両郡の守護代神保氏は早くよりこの芦嶺寺周辺を支配下に置き、戦国期には池田城に寺崎氏を在城させ、その支城である礼拝殿城（現立山町城前）と共に北方から来拝山を経て芦嶺寺に至る道筋を押さえた。土肥氏の支配領域は、その寺崎氏の支配する芦嶺寺・池田周辺と海岸部の滑川との中間に位置する形になる。もっとも、「越州新川郡郷庄古城」⁽³⁾によると、池田城には初め土肥美作守の家老川瀬与八郎が居城していたと伝えており、池田にも一時土肥氏の勢力が及んでいたのかも知れない。また、土肥氏自身も立山信仰とは深い関わりがある。たとえば、文明3年（1471）11月16日、土肥右京亮将真が芦嶺寺に父母・祖先の菩提のため田地一段を寄進し、5月から7月までの往来者に入浴させているのは、その一例であろう。⁽⁴⁾

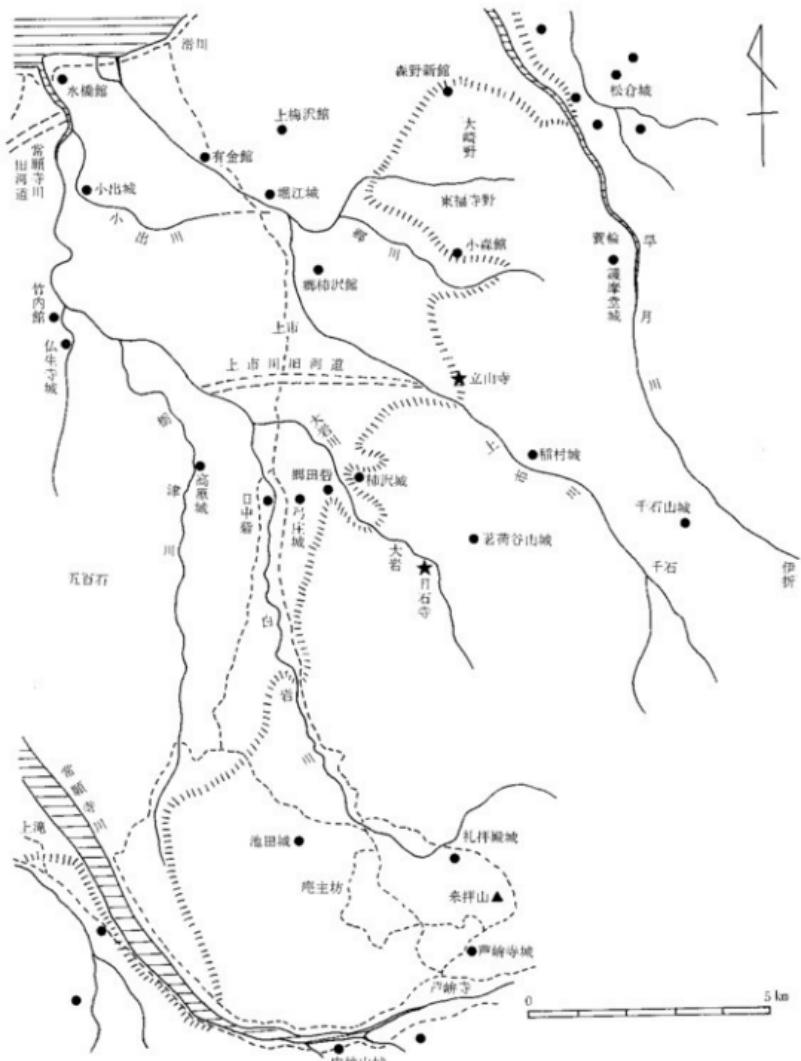


図11 上市町周辺の城館と交通路 (註)清川～芦崎寺間は立山参詣路を記入。

一方、これとは別に白岩川や柳津川、郷川などを中心とした河川の水運も存在した。この内、郷川は古くは堀江や小出を経て西流し、白岩川に合流して日本海に出ていたとみられている。⁽⁵⁾ それらの内陸水運は井見庄や堀江庄、高野庄などの庄園年貢を海岸の港へ輸送する場合にも使われていたと考えられる。有金館・堀江城・郷柿沢館・小出城・竹内館・仏生寺城・高原城・弓庄城など多くの城館がこれらの河川沿いに立地するのは、こうした水運と城館の関わりの深さを如実に物語るものである。

2 土肥氏の城館配置

上市町域を中心とした土肥氏の支配領域内には計9ヶ所の城館が存在する。それらの城館の分布状況を示したものが図12である。試みに城館相互の距離について見ると、稲村一郷柿沢間の6km（直線距離、以下同じ）を例外とすれば、他は1~4.5km程度を隔てて分布する。次にこの土肥氏の城館群を本城一支城の関係からながめてみたい。図13は戸舟期の書上類に基づき作成した土肥氏の支城関係図である。同図によれば、城館群は稲村・千石山を詰城とするAグループ、茗荷谷山を詰城とするBグループにはっきりと分れる。さらに図13は比高や地理的な位置などを考慮して、図14のように整理できる。すなわち、上市川沿いのAグループの場合、千石山は堀江の、また稲村は堀江・郷柿沢の詰城であると伝えられるが、地理的に見て千石山は稲村よりも上市川の上流部に位置し、標高の点でも同グループの中で最も高い要害である。この場合、稲村と千石山はAグループ内で同じ詰城としての性格を有していても、千石山の方が稲村のさらに奥の詰城とも言うべき所に位置することになろう。また、千石山・稲村と堀江の中間に位置する郷柿沢は、必然的に両者を結ぶ「つなぎの城」としての性格を帯びる。一方、堀江の北西に近接する有金は堀江を守る支城にあたる。

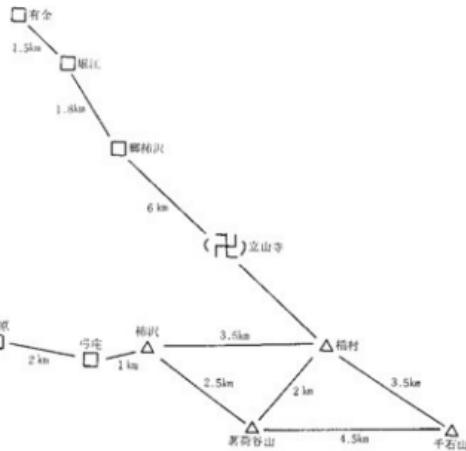


図12 土肥氏の城館配置と支城間の距離
(社)□は平地の城館、△は山城

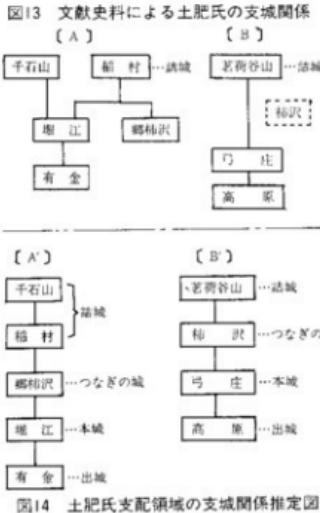


図13 文獻史料による土肥氏の支城関係
〔A〕 〔B〕

こうして見ると、Aグループの場合、日常の本拠はおそらく平地に築かれた堀江で、万一の際は稻村、千石山などにたて籠るといったパターンになっていたものと思われる。堀江がこの地域の中心地であったことは、平安末期以来の堀江庄の長い歴史からも明らかであり、土肥氏自身も同庄と深い関わりを有し、この地域を主要な経済的基盤としていたことが知られる。これに対し、白岩・大岩川沿いのBグループの場合、日常の本拠は平地の弓庄であり、栃津川沿いの高原はその西の支城で、万一の際の詰城が若荷谷山であったとみられる。そして、弓庄と若荷谷山の中間に位置する柿沢は、両城を中継する「つなぎの城」だったであろう。「弓庄」は土肥氏が戦国期に代官を勤めた井見庄にちなんだ城名であり、同城が井見庄支配の拠点となる当地域の中心地に築かれたことは、発掘調査の結果などからも明らかであろう⁽⁶⁾。

3 山城の性格

次に上市町域周辺の山城の性格をいくつかの角度からながめてみよう。図15は各山城（日中は山城とは言えないが、参考までに記入した）の比高を記入したものである。一般に比高の大きい高所に立地する山城は、地形上、要害としての性格が強い。一つの目安として比高100mを基準とし、これより比高が大きいかどうかで各山城の要害度を考えてみたい。それによると、弓庄に対する付城（向城）である郷田と日中を除外すれば、他はいずれも比高100m以上を測り、一応要害としての性格を備えている。この内、比高が300m以上もある千石山と若荷谷山の2ヶ所は特に要害度の大きい部類に属し、中でも比高500mの千石山は極端に要害性を重視した城と言えよう。これほど高所に立地する城は周辺の山野に対する眺望はすぐれているものの、麓の村落との日常的な結びつきは考え難く、ほとんど隔離した位置にある。土肥氏の一方の本拠であった堀江城主の「別荘」という伝承もあるが⁽⁷⁾、むしろ軍事的な防御拠点としての性格が強い。

図16は山城の比高と郭の数を見たものである。一般に郭の数が多いほど城郭として規模や居住性が大きくなり、比高が大きくなるほど要害としての性格が強くなる。この観点から見ると、

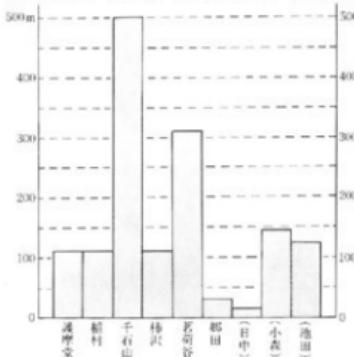


図15 上市町周辺の山城の比高

(註)1. ()は町域外の山城。

2. 段丘上に築かれた付城の日中は山城とは言い難いが、参考のため記入した。

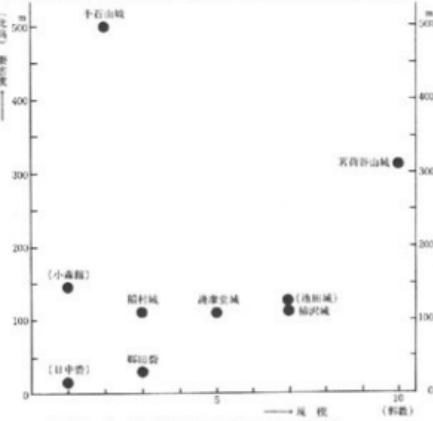


図16 上市町周辺の山城の比高と郭数

(註)1. ()は町域外の山城。

2. 段丘上に築かれた付城の日中は山城とは言い難いが、参考のため記入した。

千石山は郭数2と居住性（規模）が小さいにもかかわらず、比高については他の山城を抜いてはるかに高所に立地する。居住性よりも軍事性を極端に優先していることが明らかである。これに対し、茗荷谷山は比高300m余りで要害度がかなり高いにもかかわらず、郭数は10と最多であり、居住性も一応考慮されていることが知られる。同城が要害性・居住性を共に備え、当地域の中でもバランスのよい最大の山城であることがわかる。郭数5以上の護摩堂・柿沢・池田の3ヶ所も居住性の大きい、かつ要害性を兼ね備えた山城と言つてよい。また、稲村は郭数が3で、規模はやや小さい形になるが、山頂の主郭がかなり広い削平面を有していることから、居住性は大きい部類に属しよう。

三つの図17は各山城の堀切数と郭数の関係を見たものである。尾根筋を切る堀切数が防御力の大小、郭数が規模の大小を示すものと考えたい。これによると、特に池田と茗荷谷山は居住性・防御力が共に大きく、かつバランスがよい。特に、茗荷谷山については、全体の中で防御力が最もすぐれていることになる。護摩堂は規模も大きいが、防御力がさらに重視されている。また千石山は規模に比べ、防御力が極めて重視された形を示す。これに対し、規模（郭数）が大きいにもかかわらず、堀切数が極めて少ない柿沢は別の面で特徴的である。上市町域内の土肥氏城郭群の中にあって、このように堀切の使い方が少ない城も珍しい（稲村も厳密に言えば少ないが、山上部の周囲にかなりの急斜面がめぐることから、地形上不要だったとも言える）。もう一つ、主郭の2面に高く、明確な土堤がめぐることも特徴的であり、土肥氏城郭群の中ではかなり異質なプランを呈することに注目したい。あるいは、土肥氏以外の勢力が築いた可能性を有する城なのであろうか。結じて、土肥氏の山城の特徴としては、(1)要害度の強い高所にありながら、(2)山上の削平をていねいに行い、(3)堀切なども手抜きをせず、深く掘り込んでいることなどが指摘できる。また、繩張自体は古い形を踏襲しており、戦国末期に至っても、特に新しい手法により改修した形跡が認められないのも特徴と言える。

以上、上市町域とその周辺の城館についてさまざまな角度からながめてきたが、これらの城館も最終的には天正11年（1583）の土肥氏の弓庄城退去と共にその使用に終止符が打たれることになる。それは当地域における戦国という時代の終焉でもあった。

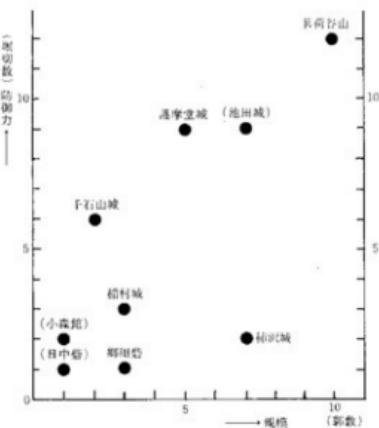


図17 上市町周辺の山城の堀切数と郭数

- (註) 1. () は町域外の山城。
- 2. 段丘上に築かれた行城の日中は山城とは言い難いが、参考のため記入した。
- 3. 日中については、便宜上、空堀を堀切とみなしした。
- 4. 稲村と茗荷谷山については、尾根筋に設けられた切岸を堀切の中に算入した。
- 5. 池田については、笠塙も算入してある。

註

- (1) 『富山県大山町中世城館調査報告書』(高岡 徹執筆) 参照。
- (2) 『富山県歴史の道調査報告書一立山道一』
- (3) 金沢市立図書館蔵
- (4) 芦餅寺一山会文書
- (5) 石原与作「立山町付近に存在した庄園の名について特に堀江庄を例として」(『富山史壇』56・57合併号)
- (6) 土肥氏の城館配置については、以前、「富山県上市町柿沢城と国人士肥氏の城館配置」(『かんとりい』6号、1982) の中で述べたことがあり、参照されたい。
- (7) 越中古跡粗記(金沢市立図書館蔵)

おわりに

富山県内には200ヶ所余りの中世城館遺跡が存在するが、それらはみな、地域に根差した中世という時代の象徴である。特に本県のように文献史料の乏しい地域にあっては、城館は市町村やそれより小さい地域の中世史を解明する貴重な手がかりとなる。たとえば、中世史料のほとんどなかった町や村で、城館跡が発見されたことにより、初めてその町や村の中世の実像が浮び上がったという例も少なくない。

近年、そのような評価を背景に、全国的な動きとして中世城館の調査研究が盛んに行われるようになった。その結果は続々と世に出されているが、軍事的な性格を重視しすぎたり、縄張図の作成と縄張相互の比較検討に多大の労力を費やすあまり、その城館が所在する地域との関わりがほとんど語られていないものも多い。地域との関わりを抜きにして城館を語ることはできず、またその認識がなければ、いくら城館を調べても地域に調査の成果を還元することはできない。地域の中で城館がどのような位置を占めたかを常に念頭に置いておく必要がある。

今回、上市町が町単位の城館調査報告書を刊行されようとした意義は大きい。上市町はともすれば、松倉城郭群を擁する魚津市の陰に隠れて、これまであまり注目されることがなかった地域である。しかし、上市町は鎌倉期以降、堀江庄を拠点に成長し、戦国期の終焉を飾る弓庄での籠城戦を戦った越中土肥氏ゆかりの町である。その土肥氏が町内各地に築いた城館群は、それなりに土肥氏の特徴をとどめながら現在も遺構を残している。今後、町当局がこれらの城館を核として、ふるさとの歴史を語る史跡の保存・活用を進められ、貴重な遺構を後世に伝えられることを願ってやまない。

なお、末尾ながら本報告書掲載の城館跡調査に際し、これまで現地での踏査・実測作業や資料提供等で多くの方々の御協力をいただいた。記して、深く感謝の意を表したい。(敬称略、※は、とやま歴史的環境づくり研究会員)

[郷 柿 沢 館] 久々忠義・橋本正春

- [稻 村 城] 藤田富士夫・阿閉元彦※・杏掛隆信※
- [千 石 山 城] 高慶 孝（町教委）・中田昌志※・服部耕一郎※・岡子光太郎※・貴戸勘次※（＊当城北側の堀切の存在については、佐伯哲也の繩張図により情報を得た。）
- [柿 沢 城] 藤田富士夫・中田昌志※・高慶 孝（町教委）
- [若荷谷山城] 中田昌志※・高慶 孝（町教委）
- [郷 田 磐] 久々忠義・橋本正春・中田昌志※
- [諫 摩 堂 城] 桥原孝志※・高慶 孝（町教委）
- [日 中 磐] 松岡宗次・久々忠義・橋本正春・石崎敏秀・中田昌志※
- [高 原 城] 上谷宗芳

また、久保尚文・高森邦男の両氏からは当地域の庄園等について種々御教示をいただいた。あわせて、厚くお礼申し上げたい。

平成6年3月 高岡 徹

富山県上市町
中世城館調査報告書

発行日 平成6年3月

編集・発行 上市町教育委員会
高岡 徹

印 刷 株式会社 チューエツ

